



TITLE:

# <サーヴェイ論文>知識論証 --その 歴史と展望

AUTHOR(S):

山口, 尚

---

CITATION:

山口, 尚. <サーヴェイ論文>知識論証 --その歴史と展望. Contemporary and Applied Philosophy 2009, 1: 1042-1074

ISSUE DATE:

2009-12-21

URL:

<https://doi.org/10.14989/120335>

RIGHT:

# 知識論証      その歴史と展望\*

山口尚

## 概要

The objective of this article is to give an inclusive description of the history of the controversy over one of the most well-known anti-physicalist arguments, the Knowledge Argument. Ever since this argument was presented by Frank Jackson in 1982, many philosophers and scientists have criticized it in many ways. The author tries to cover all the important responses to the argument without giving any support to a particular position.

The article is divided into two sections. Section 1 introduces and formulates the Knowledge Argument and explains its core idea. It will be pointed out that the argument is based on an apparently natural intuition that any amount of scientific knowledge cannot comprehend the subjective aspects of mental experiences. Section 2 surveys the controversy around the argument by diachronically taking up the main objections and replies. It contains detailed expositions of the Ability Response, the Acquaintance Analysis, the Old-Fact/New-Way Strategies, the New-Fact Strategy and Jackson's recent position.

Keywords: Knowledge Argument; Frank Jackson; Qualia; Physicalism.

本稿は「知識論証」の歴史を叙述するサーヴェイ論文である。知識論証をめぐる論戦の展開を時系列に沿って追いたい。

はじめに本研究の意義と目的を述べておこう。知識論証と物理主義をめぐる問題は心の哲学において最も議論されているテーマのひとつである。多くの研究者が多くの意見を提出しているため、論戦の状況を整理する必要がある。本稿は主要な見解を網羅的に紹介することを目指す<sup>\*1</sup>。

記述にあたって次の二点をモットーとした。

1. 特定の論者の意見へ肩入れしないこと。
2. 見解を分類するにあたり、現在標準的と見なされている基準に従うこと。

私自身も知識論証に関して一定の意見をもっているが、それによって各々の論者の見解を評価することはしなかった。また、サーヴェイにおいては競合する見解を分類する必要性が生じるが、私は独自の分類法の提案を目指さず既存の標準的な区分<sup>\*2</sup>に従うことにした。説明の明確化のために私の

\* CAP Vol.1(2009) pp.1042-1074. 受理日: 2009.09.07 採用日: 2009.11.21 採用カテゴリ: サーヴェイ論文 掲載日: 2009.12.21.

<sup>\*1</sup> 同様の目的でなされた研究としては Stoljar and Nagasawa 2004 や Nida-Rümelin 2002 などが挙げられる(これらは本稿執筆の際に参照された)。

<sup>\*2</sup> こうした区分は Van Gulick 1992 に端を発する。

解釈を加える必要のある個所では「私見であるが」などと断ることにする。

本稿の議論は次の順序で進む。はじめに知識論証の内実を紹介する（第1節）。次に、この論証をめぐる論争の歴史をサーヴェイするが（第2節）その際に時代を三つに区切り、論争初期を2.1節で、論争中期を2.2節で、近年の動向を2.3節で紹介する。最後に、結語として今後論じられるであろうトピックを指摘したい。

（文献の参照に関する注意。本稿は歴史研究であるので、文献の指示は著者名と初出の出版年を用いた。ただし、すべての文献について初出の版を手に入れることはできなかったので、ページ番号の参照について再版の著作を用いたケースがある。本稿におけるページ番号の参照は次の規則に従う。文献表で再版を記した著作に関しては、その項の書誌情報の一番最後に挙げられた著書を用いてページ番号を指示する。例えば Tye 1998 のページ番号の参照は著書 *Consciousness, Color, and Content* を用いる）

## 1 白黒のメアリー

知識論証とは何か。表面的な説明は以下である。オーストラリアの哲学者フランク・ジャクソンはいまや古典となった論文（Jackson 1982）において、「物理主義 physicalism」あるいは「唯物論 materialism」を反駁するために、ある論証を提示した。この論証が「知識論証 knowledge argument」である。

それはどのような論証か。いくつかの複雑な背景事情を無視すれば<sup>\*3</sup>、次のように言われうる。すなわち、知識論証は仮想的な神経生理学者にまつわる思考実験に基づいて構成される、と。さっそく見てみよう。はじめにラフスケッチを提示し、その後に補足説明を与えたい。

### 1.1 知識論証の骨組み

ある女性　メアリーという　が生まれたときからずっと白黒の部屋に閉じこめられ、白黒しか見えない環境で生活している。メアリーは白黒の書物と白黒のテレビを通じて世界について学び、人間の視覚の神経生理学の専門家となる。ここで、メアリーが世界についてのすべての物理的情報を（したがって人間の色視覚について得られうるすべての物理的情報を）有していると仮定しよう<sup>\*4</sup>。この前提のもとでジャクソンは次のように言う。

メアリーが白黒の部屋から解放された場合あるいはカラーテレビが与えられた場合に何が生じるであろうか。はたして彼女は何かを学ぶか否か。明らかに彼女は世界と我々の視覚経験について何らかのことを学ぶと思われる。しかし、そうすると、彼女の先立つ知識が不完全であったことは避けられない。他方、彼女はすべての物理的情報を有していた。それゆえ、物

<sup>\*3</sup> 「複雑な背景事情」はとくに以下の二点である。（1）ジャクソンはオリジナルの論文においてふたつのバージョンの知識論証を提示した。（2）ネーゲルの有名なコウモリ論証（Nagel 1974）も知識論証へ分類されることがある（例えば McMullen 1985: 214, Jacquette 1995: 218 など）。それゆえ知識論証は、英語で言えば、'knowledge arguments' と複数形で述べられるのが適切である。ただし知識論証をめぐる論争において最も頻繁にとり上げられてきたのは以下で紹介されるメアリーのバージョンである。本稿も、とくに断らない限り、「知識論証」という語によって「メアリー論証 the Mary argument」を指す。

<sup>\*4</sup> この仮定についてはすぐ後の補足説明の（2）を参照せよ。

理的情報以外にも獲得されるべきものが存在し、物理主義は偽であることになる。( Jackson 1982: 130 強調は原著者による )

ジャクソンによれば、メアリーは、一切の物理的情報を得ているにもかかわらず、色についてあることを知らない。ジャクソンの言い方では、メアリーは色彩の知覚の「現象的側面」あるいは「クオリア」\*5を知らない ( Jackson 1982: 130 )。それゆえ、物理的情報以外にも知られるべきものが存在することになり、物理主義は偽である。

こうしたいわば「メアリーの事例 Mary's case」をジャクソンは「知識論証」と呼んだ。この事例は次のような論証のかたちに形式化される \*6。

Pre1 メアリーはすべての物理的情報（とくに色視覚に関する）を知っていた。

Pre2 部屋から出たときメアリーは新しいことを知った。

Conc よって、すべての情報が物理的であるわけではなく、物理主義は偽である。( Pre1 と Pre2 より )

これが知識論証の定式化（正確にはひとつの定式化）である。知識論証は物理主義が偽であることを結論する。そのため物理主義陣営の哲学者はこの論証へ反論しなければならない。

## 1.2 補足説明

以上の説明はラフスケッチである。「メアリー論証」の適切な定式化は以後の論争においてさまざまな角度から再考される。ここではさしあたり必要な補足説明を三つ与えたい。

( 1 ) 「物理的」や「物理主義」の意味は？ 知識論証を論じる哲学者は「物理的」を以下のような広い意味で用いる。まず「物理的」は物理学、化学、生物学、生理学などのいわゆる自然科学全般にかかわる。この意味で本稿の「物理的」は広い。だがこれだけではない。「物理的」は認知科学や心理学の一部にもかかわる。例えば認知科学や心理学において行動主義的傾向の強い部分は「物理学的」と形容される。このように、ここでの「物理的」や「物理学的」はかなり広い。この語は、粗っぽく言えば、通常「科学的」と形容されるすべてのものをカバーしている。それゆえ、以下では「物理的事実」や「物理的情報」などの術語が用いられるが、これらの語はいわゆる「科学的事実」や「科学的情報」として理解されたい。

このため「物理主義」という語の射程も広くなる。この語もいわば「科学主義」を意味する。つまり物理主義は、直感的に言えば、《科学的な探究だけですべてのことが知られる》という立場である。以下の議論にとって便利な定式化をあげておこう。物理主義は《すべての情報は物理的情報である》という立場である。これはジャクソンの論文における定式化でもある ( Jackson 1982: 127 )。

( 2 ) 知識論証の核となる発想は？ 知識論証は《物理学的な科学は不完全だ》という直感に基

\*5 クオリアはときに「主観的性格 subjective character」、「どのようなものか what it is like」、「感じ feeling」などとも呼ばれる。本稿もこれらの語を併用し、とくに意味を区別しない。

\*6 実のところ Jackson 1982 では明示的な論証形式が与えられていない。そのせいもあり、《知識論証をどのように定式化するか》もひとつの争点である。ちなみに物理主義陣営にも反物理主義陣営にも偏らないフェアな精神でメアリー事例を分析した形式化と思われるのは Nida-Rümelin 2002 で「V3」と呼ばれる形式化である。

づく。すなわち、科学的な知識をいくら積み重ねても、とりこぼされる知識が存在する、ということである。ある研究者はこの考えを「知識直感 knowledge intuition」と名づける (Stoljar and Nagasawa 2004)。ジャクソンの「知識直感」は彼の次の言葉に表れている。

身体感覚がもつ一定の側面や知覚経験がもつ一定の側面は、純粹に物理的な情報をどれほど集めてもカバーできない。このように私は考える。生きているひとの脳の中で起こることについて知られうる物理的なものをすべて私が知ったとしよう。例えば、種々の状態、その機能的役割、他の時点の状態との関係、他者の脳で生じる状態との関係、などである。このとき、こうした物理的な知識をどれほど巧妙に組み合わせようとも、痛みのあの痛々しさ、皮膚病のかゆみ、嫉妬のイライラ感、レモンを味わったり、バラの香りを嗅いだり、騒音を聞いた、空を見たりするなどの特徴的な経験、こうしたものを私は知ることができない。(Jackson 1982: 127)

こうした直感は、「直感」と呼ばれるだけあって、もっともらしく感じられる。知識論証は、この知識直感に基づいて、物理主義を棄却する。

以上の点を押さえると《メアリーが物理学的に全知 physically omniscient である》という前提の意図も理解される。この前提は知識直感が物理主義を否認する明白なシチュエーションを提供する。次にこの点を確認しよう。

まず、ジャクソンのストーリーどおり、生まれてからずっと白黒の部屋で暮らすメアリーが白黒のメディアを通じて勉学に励み、最終的にこの部屋で学ぶすべてのことを学んだと仮定する。つまり彼女は物理学的に全知である<sup>\*7</sup>。

他方で物理主義は《すべての情報は物理的情報である》という立場であった。それゆえ、もし物理主義が正しければ、すべての物理的情報を知っているひとは端的にすべての情報を知っていることになる。したがって、もし物理主義が正しければ、物理学的に全知なメアリーは端的に全知であることになる。かくして次のように言われうる。すなわち、もし物理主義が正しければ、メアリーには新しく学ぶことは何ひとつない、と。

さて、まさにメアリーが物理学的に全知であるという状況においてこそ、知識直感は 仮にそれが正しければ 明快に物理主義を棄却する。ジャクソンのストーリーに従い、次の事態を考察しよう。ある日、メアリーは白黒の部屋から解放される。彼女は外の世界で色を経験する。このとき彼女に何が生じるか。彼女は何かを学ぶか否か。

知識直感を信じるならば、メアリーは世界について(とくに人間の視覚経験について)何らかのことを学ぶと思われる。というのも、知識直感によれば、科学からはみ出す知識が存在するからである。例えばメアリーは白黒の部屋から出た直後に熟したトマトを見る。メアリーは衝撃を受けて叫ぶ。「これが赤色を見ることなのね！」メアリーは続けて叫ぶ。「私は色視覚についてたくさんことを学んできたけど、このことは知らなかった！」

まとめよう。《メアリーが物理学的に全知である》という前提は知識直感が物理主義とドラスティックに衝突する状況を与える。つまりこの前提は、非現実的であるが、要点を明確化するため

<sup>\*7</sup> 「物理学的に全知」とは、具体的には、《物理的事実に関する任意の質問に対して、正しく回答できる》という状態を意味する。

メソディカル  
の方法的な前提であると言える。

(3) 知識論証からの帰結は？ 知識論証は物理主義が間違いであることを結論する。すると、どうなるか。そこからの帰結のひとつは「二元論 dualism」が正しいというものである。とくにジャクソンは知識論証から「随伴現象説 epiphenomenalism」が帰結すると主張する (Jackson 1982: 133)。随伴現象説は、一般に、次のふたつのテーゼによって特徴づけられる。

- 物理的なものに加えて心的なものが存在する。
- 心的なものは、物理的なものから作用を受けうるが、物理的なものへ作用しえない。

ひとつめのテーゼはあらゆる二元論に共通するものであり、ふたつめのテーゼが随伴現象説の特色を表現する。ジャクソンはなぜ知識論証から随伴現象説が帰結するのかを明示的に説明していないが<sup>\*8</sup>、私は一定の理由づけが可能であると考え<sup>\*9</sup>。とはいえ こうした理由づけが正しいか否かは別にして ここで押さえるべき点はジャクソンがオリジナルの論文において随伴現象説を支持した点である。

## 2 論争の歴史

分析哲学者の多くは、周知のとおり、何らかのタイプの物理主義者である。それゆえ多くの論者が知識論証を批判する。他方で、この論証に好意的な論者もいる。本節では論争の歴史を追いたい。その際、時代を区分すると便利である。1982年の論文公表後から1990年までを「第1期」、1991年から1997年までを「第2期」、1998年(この年に「大事件」が起きる!)から現在までを「第3期」と呼ぼう。

### 2.1 ジャクソンと第1期の批判者

ジャクソンの論文が公刊されて間もなく、多くの哲学者たちが知識論証を批判した。以下では初期の代表的な批判者の反論とジャクソンの再反論をとりあげたい<sup>\*10</sup>。

(1) ポール・チャーチランド・チャーチランドは、有名な論文 (Churchland 1985) で、知識論証が間違っていると主張した。彼はそこで三つのタイプの反論を提示する。これらの反論の間の関係には不明確な点もあるが、これは論文が書かれた時期の早さのためであろう。好意的に解釈すればチャーチランドは、複数の批判が存在することを指摘することによって、知識論証のどこかが間違っていることを確かなものにしようとしたと言える。以下、それぞれの反論の内実を確認しよう。

<sup>\*8</sup> 困ったことに Jackson 1982 でも Jackson 1986 でも説明されない。

<sup>\*9</sup> 私見であるが、おそらくジャクソンは、心的なものの本性が物理的なものへの作用によって汲み尽くされると考える場合には、心的なものが物理的なものによって機能的に定義されうることになると考えていた。例えば、痛みは《痛みの原因を遠ざけたり、主体に「痛い」と言わせたりする状態》である、などのように。この場合、心的なものが物理的なもので定義されてしまうので、二元論は成立しない。かくしてジャクソンにとって唯一可能な二元論は心的なもの(の何らかの側面)から物理的なものへの因果を否定する二元論 随伴現象説 であった。

<sup>\*10</sup> 紙幅の制約のため割愛せざるを得なかったが Horgan 1984, McMullen 1985, Levin 1986 などは第1期の重要な論文である。ホーガンの見解については山口 2008 で詳しく紹介されている。マクマレンの論文は知識論証と「指標詞 indexicals」の関連を初めて主張したものであり、レヴィンの論文は能力仮説(後述)の批判で有名である。

第一の反論。知識論証は以下のように定式化された。

Pre1 メアリーはすべての物理的情報（とくに色視覚に関する）を知っていた。

Pre2 部屋から出たときメアリーは新しいことを知った。

Conc よって、すべての情報が物理的であるわけではなく、物理主義は偽である。（1と2より）

チャーチランドはこの論証が「曖昧さの罪」を犯していると主張する（Churchland 1985: 23-24）。彼によれば「知る」という語は Pre1 と Pre2 で同義でない。というのも、曰く、Pre1 における「知る」は「文や命題 神経科学の教科書で見出される類のものを理解していること」であるが、Pre2 における「知る」は「感覚的区別を為しうること」などを意味するからである（Churchland 1985: 23）。チャーチランドは言う。

要するに、視覚にかかわる皮質についてすべてを知っているが赤の感覚を得たことがないひとと神経科学はまったく知らないが赤の感覚をよく知っているひとの違いは、各人によって知られている事柄（前者によっては脳状態、後者によってはクオリア）に存するのではなく、彼らが完全に同一のものについて有している知識のタイプの違いに存するのである。違いは知ることの様式 manner にあるのであり、知られているものの本性にあるのではない。（Churchland 1985: 24 強調は原著者による）

チャーチランドのこうした反論は 現在こう表現されるが 旧知の事実が新しい様式で知られるというアイデアを活用する。これは、《オーロール・デュパンが女性である》と知っているひとが、「ジョルジュ・サンドは女性である」という雑誌記事を読んで、旧知の事実を別の仕方では知りうるのアナログカルである。この発想に基づいて知識論証へ反論する立場はいくつかのヴァリエーションがある。これらは、現在、総称的に「旧事実/新様式戦略 Old-Fact/New-Way Strategy」などと呼ばれ、多くの論者に採用されている<sup>\*11</sup>。すぐ後で紹介するビゲロウトとパーゲッターの立場は典型的な旧事実/新様式戦略である。また、さらに後で紹介する「現象概念戦略」やライカンの立場も旧事実/新様式戦略のひとつである。

第二の反論。チャーチランドは次に「もし知識論証が正しければそれは多くを証明しすぎる」と言う（Churchland 1985: 24）。すなわち、チャーチランドによれば、知識論証が物理主義を棄却する理屈が正しければ、同様の理屈によって知識論証は二元論を棄却する。彼は次のように言う。

ジャクソンが反駁しようとしていたものが、唯物論ではなく、二元論であると考えてみよう。すなわち《「エクトプラズム」と呼ばれる非物質的実体が存在し、その謎の組成と法則的連関にすべての心的現象に基づいている》という見解をジャクソンが攻撃していたとしよう。この場合、我々の修道女メアリーは「エクトプラズム研究者」とであるとされ、彼女は視覚の基礎にあるエクトプラズムの過程に関して知られるすべてのことを知っている前提される。だが、このときにも、彼女が知らないことが存在する。それは《赤を見るとはどのようなこ

<sup>\*11</sup> ビゲロウトとパーゲッター、「現象概念戦略」の採用者あるいはライカン以外で旧事実/新様式戦略の採用者と分類されるのは以下である（「うる」というのは「多面的な」理論の提唱者もいるからである）。Horgan 1984, McMullen 1985, Tye 1986, Pereboom 1994, Nida-Rümelin 1995, Perry 2001.

とか》である。それゆえ二元論はすべての心的現象を説明するのに十分でない。(Churchland 1985: 24-25)

チャーチランドによれば、ジャクソンの知識論証と同様の理屈を用いて反二元論的論証が組み立てられる。これは次のように形式化される。

Pre1' メアリーは二元論が認めるすべての情報を知っていた。

Pre2' 部屋から出たときメアリーは新しいことを知った。

Conc' よって、二元論が認める情報がすべての情報であるわけではなく、二元論は偽である。(1と2より)

それゆえ、チャーチランド曰く、仮にジャクソンの知識論証が正しければ、この反二元論的論証も正しい。ここからジャクソンの知識論証が正しくないことが帰結する。というのも、仮にそれが正しいとすれば、二元論が正しくかつ正しくないという自家撞着的な帰結が導き出されてしまうからである。

以上の反論はしばしば「同様理屈反論 Parity-of-Reasons Objection」と呼ばれる。命名の由来はもちろん二元論を支持する論証と同じ理屈を用いて二元論を反駁する点である。

この反論は知識論証をめぐる論争へ重要なインスピレーションを与えてきた。すなわち、チャーチランドによる反二元論的な知識論証にインスピレーションを得て、幾人かの論者は《知識論証が正確に何を反駁しているのか》という問題を再考した。こうした論者は知識論証が物理主義を反駁せず何か別の立場を棄却しているのではないかと考える(そして、もし物理主義を反駁しない知識論証こそが正当な知識論証の定式化であるならば、物理主義は知識論証によって論駁されないことになる)。例えばユウジン・ナガサワは、知識論証が物理主義 vs 二元論という対立にかかわるのではなく還元主義 vs 非還元主義という対立にかかわると主張し、知識論証が実は還元主義を棄却していると言う(Nagasawa 2002)。それゆえ、ナガサワによれば、非還元主義的な物理主義という立場が可能であれば、こうした物理主義は知識論証によって棄却されない<sup>\*12</sup>。このように《知識論証が正確に何を反駁しているのか》も論争のひとつの論点である。

第三の反論。知識論証は物理学的に全知なメアリーが端的に全知でない<sup>1</sup>と考える。だが、チャーチランドによれば、この主張は偽である(Churchland 1985: 25)。なぜならメアリーはあらゆる情報を、それゆえクオリアに関する情報を、すでに有しているからである。チャーチランドは言う。

前提1 [Pre1] が真であるときにジャクソン [...] が前提2 [Pre2] もまた真であると考えるのは、次の点をキチンと考えていないからである。それは、仮に 前提1 が言うようにひとが物理的な脳神経システムについて知られうるすべてを知った場合には、このひとはどれほど多くのことを知ることになるのか、という点である。[ジャクソンは] とくに我々の内的状態を記述する概念枠組み conceptual framework の全面的改訂が行われ、内的状態を内観する仕方に変化が生じることを考慮すらしていない。(Churchland 1985: 25 四角括弧内の補足は引用者による)

<sup>\*12</sup> 物理主義を棄却しない知識論証については Holman 2006 や Howell 2007 も参照せよ。



チャーチランドは科学的情報が、概念枠組みを改訂することによって、メアリー・ヘクオリアの情報を与えようと主張する。こうした事態は、彼によれば、以下のようにして生じる。まず物理学的に全知なメアリーは自分の内的状態を神経科学の術語によって概念化できるようになる。例えばメアリーは自分の視覚的感覚を「黒色の感覚」、「灰色の感覚」、「白色の感覚」などと同定せず、それをニューロンの発火パターンとして同定する。このときメアリーは、こうした「神経科学的」概念枠組みを用いて、一度も体験したことの無い視覚経験を想像できる。例えばメアリーは、たとえ感覚状態  $S$  を一度も体験したことがないとしても、 $S$  に関する神経科学的概念を有している。それゆえ彼女は、 $S$  と関連する脳神経状態に自分があることを想像することによって、彼女が状態  $S$  にあることを想像しうる。

もちろん この点はチャーチランドも認めるが、メアリーがこうした仕方ですべて「色を想像できる」と言うことは「妙きりん outlandish」に感じられるかもしれない。だがチャーチランドはこうした事態が「読譜」や「初見視唱」と同様の事態であると指摘する (Churchland 1985: 26)。熟練した演奏家は楽譜から、聴覚的想像力をとおして、それがどのような曲であるのかを知りうる。メアリーについても同じである。彼女は物理的情報から、同様の仕方ですべて赤色を見るときはどのようなことかを知る。読譜や視唱は実際に可能であるので、メアリーが色を想像することも不可能でないにちがいない。

第三の反論はジャクソンの思考実験そのものの是非を問題にしていると言える。ジャクソンは白黒部屋のメアリーが明らかに経験の一定の側面を知らないと考えた。第三の反論はこの点を疑問視する。すなわち、ひょっとするとメアリーは知っているのではないかと。要するに、第三の反論によれば、ジャクソンの思考実験は誤った思考に導かれているのである。この路線を継承し後に知識論証を批判するのがデネットである (Dennett 1991, 2004, 2007)。デネットはジャクソンの思考実験が二元論的なバイアスのもとに構成されていると主張する。この批判へはさらなる再批判も存在する<sup>\*13</sup>。

(2) デイヴィッド・ルイス・ルイスの論文「経験が教えること」(Lewis 1988)は、知識論証に関する彼の立場を提示するだけでなく、この論証をめぐる諸問題を多角的に論じた大作である。ここでは彼の知識論証批判の要点を押さえたい。

ルイスの知識論証批判は「能力分析 Ability Analysis」<sup>\*14</sup>に基づくが、その着想はローレンス・ネミロウのトマス・ネーゲル批判に由来する。ネーゲルは有名な論文 (Nagel 1974) において現代の物理的諸科学が《コウモリであるとはどのようなことか》などの経験の主観的事実を説明しえないことを指摘し、意識経験の物理的還元主義を批判した。だがネミロウはこうした「どのようなことか」の知 knowing what it's like をある種の能力「自らをある状態へ随意に置く能力」と捉え、主観的事実これをネーゲルは物理的諸科学からはみ出すと考えたの存在を否定する (Nemirow 1980)。この点は自転車運転に関する事実と運転する能力の区別に類比すると明確化される。物理学が私たちに自転車運転能力を与えなくても、自転車に関する非物理的事実が存在する

<sup>\*13</sup> 例えば Robinson 1993, Jacquette 1995, Chalmers 1996, Alter 1998, Graham and Horgan 2000, Beaton 2005 など。

<sup>\*14</sup> これはネミロウが Nemirow 1990: 494 で用いた表現である。

ことにはならない。この発想が知識論証批判に適用できると考えたのがルイスである<sup>\*15</sup>。

ルイスはメアリーの事例を「どのようなことか」というネーゲル的なイディオムで記述する。すなわち、ルイスの記述によれば、メアリーは、白黒の部屋に閉じこめられている限り、世界についてのあらゆる物理的情報を得ているにもかかわらず、色を見るとはどのようなことかを知らない<sup>\*16</sup>。ここでルイスは知識論証の誤りが《どのようなことかの知》を事実の知識と混同する点に基づく主張する (Lewis 1988: 285-286)。《どのようなことかの知》は「事実知 knowing that」ではない。では《どのようなことかの知》とは何か。ルイスはそれを次のように説明する。ハリーがあるひから「マゼンタを見るとはどのようなことかを知っているか」と尋ねられたとする。このとき彼は、質問に答えようとするならば、マゼンタの視覚像を想像するよう試みるであろう。このとき「ハリーはマゼンタを容易に視覚化しうるが彼はマゼンタを見るとはどのようなことかを知らない」と言うこと、あるいはその逆を言うことは不条理である。ここから《どのようなことかの知 = 想像する仕方を知っていること》という等式が立てられる。ただし《どのようなことかの知》は想像能力のみと結びつけられるわけではない (Lewis 1983b: 131)。例えば、マゼンタを見るとはどのようなことかを知る者は再びマゼンタを見た場合にそれを再認することもできれば、かつてのマゼンタを見た経験を想起することもできる。このように、ルイスによれば、《どのようなことかの知》は想像、想起、再認などの能力のクラスターと見なされる (Lewis 1988; 1999: 286-287)。簡潔に言えば《どのようなことかの知》は能力すなわち「方法知 knowing how」である。

ルイスは、《どのようなことかの知》を能力で分析する「能力分析」に基づいて、知識論証を批判する。メアリーは色を見るとはどのようなことかを知らなかった。他方、能力分析に従うと、《色を見るとはどのようなことかの知》は能力である。それゆえ物理的諸科学はこの「知識」を供給する必要はない。実際、例えば耳をピクピクさせることができない者にどのような情報を与えてもこの能力を付与できないことから分かるように、物理学や生理学は能力を供給するものではないからである (Lewis 1988: 288)。メアリーは、解放された後、新たな「知識」能力を得るが、彼女の有する事実の知識が増加することはない。

ルイス流の知識論証批判はしばしば「能力反論 Ability Objection」と呼ばれる。能力反論を採用する論者は少ないが<sup>\*17</sup>、この反論への批判者は多い<sup>\*18</sup>。とりわけ明快な批判を提示したのはコウニーである (Conee 1985, 1994)。確認しておこう。

コウニーによれば《どのようなことかの知》は能力と同一視されえない。第一に、想像・想起・再認などの能力を得ることなしに、どのようなことかの知は得られうる (Conee 1985: 298)。例えばメアリーがいかなる視覚像も想像できないと仮定する (そして彼女の視覚がそれ以外の点では正常であると仮定する)。ここでメアリーが、解放された後に、空を見るとしよう。このときメアリー

<sup>\*15</sup> このアイデアが初めて登場するのは Lewis 1983b においてである。

<sup>\*16</sup> 本稿はしばしば有彩色のことを「色」と呼ぶ。

<sup>\*17</sup> ネミロウも自分のネーゲル批判がジャクソン批判へ応用できると考え、能力反論を支持する論文を書いている (Nemirow 1990, 2007)。その他の賛同者は Mellor 1993, Meyer 2001, Pettit 2004 などである。ちなみに、後述のように、後にジャクソンも知識論証を放棄し能力反論が正しいと考える (Jackson 2002: 438-439)。

<sup>\*18</sup> コウニー以外を挙げると、例えば以下の論文には能力反論への批判が含まれる。Levin 1986, Bigelow and Pargetter 1990, Loar 1990, Lycan 1995, Nida-Rümelin 1995, Alter 1998, Gertler 1999, Alter 2001, Perry 2001, Noordhof 2003, Malatesti 2004。

は、視線を空以外に移すと、空の色を想像も想起もできない。というのもメアリーは色の視覚像を心の中で形成する能力を有さないからである。だが彼女も、空を見ている間は、空を見るとはどのようなことかを知っている。第二に、どのようなことかを知っていないときに、対応する想像能力を有することがありうる (Conee 1994: 138)。例えばマーサが色を「内挿する interpolate」達人であるとする。すなわちマーサは、すでに体験したことのあるふたつの色合いから、未体験の中間の色合いを視覚化することができる。ここでマーサがバーガンディと消防車の赤をどちらも見たことがあるがこの中間色であるチェリーレッドを内挿したことがないとする。このときマーサはチェリーレッドがどのようなものかをもまだ知らない。しかしながら彼女は、内挿の達人であるので、いつでもそれを視覚的に想像できる。以上の二点より、コウニー曰く、ルイスの能力分析は間違いである。それゆえこれに基づく能力反論も成功しない。

こうした批判に能力反論の支持者はどのように応答するだろうか。能力分析の是非も知識論証にまつわる重要な論点のひとつである。

(3) フランク・ジャクソン・ジャクソンは 1986 年の論文で批判者に応答する。ただし、書かれた時期の早さのため、言及されるのはチャーチランド、ルイス＝ネミロウ、テレンス・ホーガンだけである。以下、チャーチランドへの返答を中心に (この論文の主要なターゲットはこのひとである) ジャクソンの応答を確認しよう。

ジャクソンは、再反論に先立って、知識論証にまつわる自身の考えを明確化する。いくつか確認しておきたい。

第一に、ジャクソンによれば、知識論証において想像力は問題になっていない。彼曰く、

メアリーをめぐって問題になっていることは彼女が、神経生理学とその他の物理的な事柄について完全に理解しているにもかかわらず、赤を感覚することがどのようなことを想像できないという点ではない。むしろポイントは彼女が、事実として、それを知らないという点である。そして、物理主義が真であれば、彼女はそれを知っているはずである。想像力というたいそうな力は関係ない。(Jackson 1986: 292 強調は原著者による)

要するに問題は物理学的に全知なメアリーがすべてを知っているか否かである。何かを知らないメアリーが想像力によって自身の無知を補いうるとしてもそれは関係ない<sup>\*19</sup>。

第二に、ジャクソンによれば、知識論証において主観的な、自己自身の知識は問題になっていない。メアリーが欠く知識は「他者の経験についての知識 knowledge about the experiences of others」である (Jackson 1986: 292)。彼曰く、

メアリーが部屋を出たときに何かを学ぶというだけであれば、物理主義への反論にならない。実際、彼女が部屋を出る前には、彼女は自分自身の色経験に関する事実を知りえなかった。というのも、部屋を出る前には、そのような事実は存在しなかったからである。[...] むしろ物理主義にとっての問題は次の点である。すなわち、メアリーが熟したトマトを一度見た後には、それまで自分が他者の心的経験をどれほど貧しく理解していたのかをメアリーが見出す、

<sup>\*19</sup> ジャクソンは「想像力は知識を欠くひとが頼る必要のある能力である」と言う (Jackson 1986: 292 強調は原著者による)。

という点である。このときメアリーは[ ... ] 他者の経験に関して、自分が気づいていなかった何かがあったことを見出す。( Jackson 1986: 293 強調は原著者による )

メアリーが白黒部屋にいる間にも、他者たちは色を経験している。物理的情報は、いくら積み重なっても、この経験に関する事実 色を見るとはどのようなことが を教えない。この点こそが物理主義にとっての問題である。

ジャクソンは、以上をふまえて、チャーチランドの三つの批判へ応答する。

第一にチャーチランドはメアリーが旧知の事実を新しい様式で知っただけであると主張した。いわゆる旧事実/新様式戦略である。ジャクソンはこの反論が知識論証のまずい理解に基づくと応答する。ジャクソンによれば、知識論証を適切に定式化すると、事実を知る様式が問題でないことが判明する。その定式化は次である ( Jackson1986: 293 )。

Pre1 メアリーは ( 解放以前に ) 他者について知りうるすべての物理的なことを知っている。

Pre2 メアリーは ( 解放以前に ) 他者について知りうるすべてを知っていたわけではない。

Conc それゆえ、他者についての真理のうちには、物理的ストーリーを逃れる何かが存在する。( Pre1 と Pre2 より )

ジャクソンによれば 上で彼が指摘したように 知識論証において問題となっているのは他者の経験についての事実である。これは、知り方の様式とは独立した、「客観的な」事実である。知識論証はこうした事実が存在することを主張する。様式は関係ない。

第二にチャーチランドは知識論証が多くを証明しすぎると主張した。いわゆる同様理屈反論である。ジャクソンは、自分の知識論証の前提は正しいが、反二元論的知識論証には間違った前提が含まれると応答する。曰く、「クオリアに関する白黒テレビ講座は、クオリアに関して知られうるすべてを教えない」( Jackson 1986: 295 )。たしかにクオリアに関する機能的な事実は白黒部屋で知られうる。しかし、ジャクソンによれば、クオリアに関する事実はこうしたものに尽きない。それゆえメアリーが白黒部屋で二元論が認めるすべての情報を知っていたという前提はもっともらしくない。結局、ジャクソンによれば、二元論を棄却する「同様の理屈」など存在しない。

第三にチャーチランドはメアリーが白黒部屋で色を想像できたと主張した。ジャクソンは 先の指摘に基づき 知識論証に想像力は関連しないと応答する ( Jackson 1986: 295 )。問題はメアリーの完全な物理的知識が端的に完全な知識でないことである。たとえ彼女が自分の無知を想像力で補えるとしても、それは関係のない話である。

こうしたジャクソンの再反論にもかかわらず、物理主義陣営はその後も多くの批判を提示する。次に旧事実/新様式戦略を採用する二組、すなわちビゲロウ＝パーゲッターとロアー、の反論を見てみよう。

( 4 ) ジョン・ビゲロウとロバート・パーゲッター。ビゲロウ＝パーゲッターは、言及されることが若干少ないが重要な論文 ( Bigelow and Pargetter 1990 ) において、典型的な旧事実/新様式戦略を提示する。私見であるが、彼らの見解は旧事実/新様式戦略のいわば「抽象的図式」とであると解釈されうる。言い換えれば、彼らの立場は多くの ( ひょっとするとすべての ) ヴァージョンの旧事実/新様式戦略に妥当する一般的構造を抽出している。この意味で、彼らの戦略は ‘ the Old-Fact/New

Way Strategy' と呼ばれうる。

ビゲロウ＝パーゲッターは、彼らの論文の冒頭で、知識論証に対する自分たちのスタンスを説明する（このスタンスも旧事実/新様式戦略の典型である）。彼らは自分たちがチャーチランドの第三の応答<sup>\*20</sup>に与さないと述べる（Bigelow and Pargetter 1990: 131）。彼らによれば、知識論証の前提をどれも否定しない応答こそが正しい。なぜなら、曰く、科学によって表現可能なすべての真理が知られているときにも、経験が何か新しいことを教えうることは明らかだからである。ここからビゲロウ＝パーゲッターは言う。

[ 知識論証への応答のひとつに、] クオリアに関する非物理学的知識が存在することを否認する応答があるが、我々はこれを拒否する。我々は、物理学的理論へ還元されえない、現象的性質に関する知識が存在することを受け入れる。しかしながら私たちは次のように主張したい。すなわち、こうした知識の存在は、心的なものを純粋に物理的な術語で説明する物理主義プログラムと対立しない、と。（Bigelow and Pargetter 1990: 132 四角括弧内補足は引用者による）

ビゲロウ＝パーゲッターは、知識論証に対する可能なスタンスのうち、次のふたつの制約を同時に満たすものが望ましいと考える。第一に物理主義を否定しないこと、すなわち自然科学が世界についての完全な知識を供給することを認めることである。第二にメアリーが新しい知識を得ることを否定しないこと、すなわち白黒部屋では学ばれない種類の知識が存在すると認めることである。このふたつは、一見、相矛盾するよう見える。この「見かけの矛盾」を回避するために彼らが導入するのが「見知り関係 acquaintance relation」概念である。

ビゲロウ＝パーゲッターの「見知り関係」概念は独特な内実を有す。簡単に説明しよう。まずビゲロウ＝パーゲッターは命題を「可能世界」概念で分析する。この分析に従うと、現実世界についての命題的情報を得ることは、この現実世界がどのような可能世界の集合に属すかに関する情報を得ることと同一視されうる。例えば A 氏がアナコンダが全長 9 メートルに達すると知ったとしよう。このとき、目下の分析によれば、A 氏は《アナコンダが全長九メートルに達する世界の集合に現実世界が属す》という情報を得たと言える。ところで、この命題的情報を得る様式はひとつではない。例えば、A 氏は書物で「アナコンダは全長九メートルに達する」という文を読んだかもしれないが、他方で、B 氏が南アメリカに行って全長九メートルのアナコンダを実際に見た場合にも、B 氏は《アナコンダが全長九メートルに達する世界の集合に現実世界が属す》という情報を得る。ふたりは同じ情報を得ている。だが、それを得る様式は異なっている。そして、この情報を得る様式をビゲロウ＝パーゲッターは「見知り関係」と呼ぶのである。

ビゲロウ＝パーゲッターは「見知り関係」を「[ ... ] ある特定の世界のみで真となる信念をひとが抱くことを可能にする関係」と定義する（Bigelow and Pargetter 1990: 139）。こうした関係には、例えば、直接的体験、伝聞、痕跡の知覚などさまざまなものが含まれる。そしてビゲロウ＝パーゲッターはこの「見知り関係」が知識にどうして構成的であると主張する。言い換えれば知識は、その命題的情報だけでなく、見知り関係からも構成されるのである。それゆえ知識は、情報内容だけでな

<sup>\*20</sup> メアリーが部屋を出たとき新しく何かを学ぶという前提を否定する応答。

く、知られ方によっても個別化される。したがって同じ情報にかかわる知識が見知り関係に関して異なることがありうる。

こうした「見知り関係」概念に基づくメアリーの事例は物理主義に反さない仕方で分析されうる。白黒の部屋の中でメアリーはすべての物理的事実（とくに人間の色視覚に関するすべての物理的事実）を理論的な見知りによって知っていた。物理主義が真であるならば、この知識によってメアリーは現実世界のあらゆる事実を知っていることになる。他方でメアリーは、解放後に、新しい知識を得た。とはいえ、この出来事は物理主義に反するわけではない。メアリーはすでに知っていた事実を別の様式で ビゲロウ＝パーゲッターの言葉では「経験的に」 見知っただけである。たしかにメアリーは事実を新たな様式で知った（この意味で新しい知識を得た）のであるが、知っている事実の総量は増加していない（Bigelow and Pargetter 1990: 140-141）。それゆえメアリーの新しい知識は物理主義と衝突しない。以上の分析が先のふたつの制約をとともに充たしていることは容易に確認しうる。

私はビゲロウ＝パーゲッターの「見知り関係」が抽象的である点を強調したい。彼らの議論の優れた点は、私見であるが、旧事実/新様式戦略をきわめて図式的に提示したことである。彼らの議論には《では、さらに突っ込んで考察すると、見知り関係とは具体的に何であるのか》という疑問が提示されうる。そして、この問いへどう答えるかに応じて、旧事実/新様式戦略のさまざまなヴァージョンが区別される。例えば、見知り関係を「指標的 indexical」な関係と見なす論者がいる<sup>\*21</sup>。また次に紹介するロアーも、見知り関係を具体的に規定し、旧事実/新様式戦略のひとつのヴァージョンを提示していると見なされうる。

（５）ブライアン・ロアー。ロアーは、近年しばしば注目される諸論文（Loar 1990, 1997）において、「概念 concept」概念を鍵とする旧事実/新様式戦略を提示した。ロアーも、ビゲロウ＝パーゲッターが挙げたふたつの制約を同時に充たす知識論証批判が望ましいと考える。そこでロアーはメアリーが、白黒部屋ですべての事実を知っていたが、解放後に新しいタイプの概念を得たと主張する。すなわち、メアリーは旧知の事実を新しい概念で知っただけであり、新しい事実を知ったわけではない、ということである。この分析はふたつの制約をとともに充たす。彼の議論を確認しよう。

「概念」とは、ロアーの枠組みにおいては、認識主体が対象を把握・記述・識別する際に用いる認知的な道具立てである<sup>\*22</sup>。例えば、認識主体が水の存在を認知する際や水とアルコールを識別する際などに、《水》という概念が使用されている。ロアーはこうした概念のうちに、「物理的 機能的概念」（あるいは「理論的概念」）に加えて、「現象概念 phenomenal concept」が存在すると主張する（Loar 1990: 86）。現象概念は物理的 機能的概念とは本質的に区別される。なぜなら、ロアーによれば、これらふたつはまったく異なる指示メカニズムを有するからである（Loar 1990: 84）。例えば、物理的 機能的概念が色や音などを指示する場合、これらの概念はそれを科学的理論が指示する仕方で指示するが、現象概念は色や音を「直接的に directly」指示する。言い換えれば、前者は《……という物理的役割を演じるもの》などの物理学的記述をとおして指示するのに対し、後者はこ

<sup>\*21</sup> 例えば McMullen 1986, Perry 2001 などである。ペリーによれば、メアリーの状況は、コンサートが 2009 年 8 月 15 日に催されることを三人称的な視点から知っているが今日が何月何日なのかを知らなかった女性が、日めくりカレンダーを見るなどして、《コンサートが今日催されること》を一人称的な視点から新たに知るという状況と類比的である（Perry 2001: 103-115）。

<sup>\*22</sup> ロアーは「概念」概念を明示的に定義していないので、これは私の解釈である。

うした記述を媒介しない。現象概念は、指示対象が与えられることが「引き金」になり、その性質を直に把握する。このように現象概念と物理的 機能的な概念はタイプを完全に異にする。それゆえ、ロアーの言葉を借りると、現象概念は物理的 機能概念へ「認知的に還元されえない cognitively irreducible」(Loar 1990: 86-87)。現象概念は物理的 機能的な概念と論理的に独立であり、前者が後者から推論によって導出されることはない。

ロアーは、「現象概念」概念を用いて、メアリーの事例を物理主義に反さない仕方で分析する。白黒部屋でメアリーはすべての物理的事実を物理的 機能的な概念によって知っていた。物理主義が真であるならば、この知識によってメアリーは現実世界のあらゆる事実を知っていることになる。他方で、ジャクソンのストーリーによれば、メアリーは解放後に新しい何かを学ぶ。ロアーはこの事態をメアリーが現象概念を得たと分析する。現象概念は先述のように物理的 機能的な概念から導出されないため、メアリーはそれを白黒部屋で学ぶことができなかった。だが、新しく概念が得られたからといって、それが指示する対象も新しいとは限らない。そしてロアーは現象概念が旧知の物理的対象を指しうると指摘する(Loar 1990: 83)。結局、ロアーによれば、メアリーは旧知の物理的事実を新しい現象概念で再認識しただけである。

「現象概念」概念は近年の心の哲学において注目されている。なぜなら、現象概念の存在を認めると、心の哲学で論じられる多くの問題<sup>\*23</sup>が解決されると考えられるからである。現象概念によって心の哲学の諸問題を解決する戦略は「現象概念戦略 Phenomenal Concept Strategy」と呼ばれ、少なからぬ支持者を得ている<sup>\*24</sup>。ロアーの知識論証批判は、旧事実/新様式戦略の<sup>いち</sup>一ヴァージョンであると同時に、現象概念戦略の先駆けと見なされう。

ちなみにロアーは能力分析に対する有名な批判を提示している(Loar 1990: 86)。確認しておこう。ルイスは《どのようなことかの知》を方法知として分析した。すなわち、ルイスによれば、《どのようなことかの知》は命題内容を伴う事実知ではない。ロアーはこれに反対する。彼は「どのようなことか」に類するイディオムが条件文の前件へ埋め込まれうという事実を指摘し<sup>\*25</sup>、この事実が《どのようなことか》が命題内容を有することを示していると主張する。というのも、条件文は(通常理解に従うと)ふたつの命題から構成されるので、前件に埋め込まれうるものは命題的でなければならないからである。能力分析の支持者はどのように応答するだろうか<sup>\*26</sup>。

## 2.2 第2期の批判者とチャルマーズ

1990年代に入ってから物理主義陣営は重要な知識論証批判を提示した。他方で反物理主義陣営もチャルマーズの「援護射撃」を得て応戦する。論戦の展開を追おう<sup>\*27</sup>。

<sup>\*23</sup> レヴィンは、知識論証にまつわる問題以外に、なぜゾンビは思考可能か(Chalmers 1996 参照)などを挙げる。

<sup>\*24</sup> この名称は Stoljar 2005 による。例えば Balog 1999, Levin 2007, Papineau 2007 は現象概念戦略を支持し、Chalmers 2007, Levine 2007 はこれに反対する。またタイは、Tye 1999 では賛成するが、後に立場を変え Tye 2009 で反対する。

<sup>\*25</sup> 例えば、もし痛みがこのような感じであるならばひとは痛みを避ける、などのように。

<sup>\*26</sup> これに対する応答は Nemirow 2007: 38-39 にある。

<sup>\*27</sup> 紙幅の制約のため割愛せざるを得なかったが Nida-Rümelin 1995 は第2期の重要な論文である。彼女はメアリーの事例を改変した事例「マリアンナの事例」と呼ばれることによって旧事実/新様式戦略を後押しする。ちなみにメアリーの事例へ改変を加えて別種の知識論証を構成するという試みはしばしば行われる。例えば Warner 1986 は、色ではなく、痛みに関する知識論証を提示する。また Graham and Horgan 2000, Raffman 2005, Graham and Horgan 2005 はメアリーが物理主義者であるとい

(1) アール・コウニー・コウニーは、《どのようなことかの知》の独特の分析に基づいて、知識論証を批判する (Conee 1994)。彼は、ルイス＝ネミロウと同様に、《どのようなことかの知》が命題内容にかかわらないと考えるが、それを能力とは見なさない。彼は《どのようなことかの知》を、事実知でも方法知でもなく、「面識知 knowing by acquaintance」と見なす<sup>\*28</sup>。この概念をコウニーは以下のように説明する。

コウニーは、先に見たように、能力分析を批判する。曰く、「能力分析は、ある経験がどのようなものかを知るための要件として、多くのものを要求しすぎている」(Conee 1994:139)。実際この例は上で挙げたが、いかなる視覚像も想像・想起できないひとであっても、視覚がそれ以外の点で正常であるならば、空を見ている間は空を見るとはどのようなことかを知っている。それゆえ《どのようなことかの知》に能力は必要ない。むしろ必要なものは、コウニーによれば、「その経験を面識すること becoming acquainted with the experience」である (Conee 1994: 169)。すなわち、経験 *E* がどのようなものかを知るためには、*E* を直接的に体験するだけでよく、仮に後で *E* がどのようなものかを忘れてしまおうとしても、少なくとも *E* を「面識」している間は《*E* がどのようなものか》の知識は得られている。コウニーは言う。

経験を面識することは情報を得ることや能力を得ることを要求しない。面識は知識の第三のカテゴリーを形成し、それは事実知へも方法知へも還元されない。ある経験を面識によって知するために必要なものは、その経験への最大限直接的な認知的関係のみである。(Conee 1994: 136)

コウニーは、どのようなことかの知を面識知で分析する見解を「面識仮説 Acquaintance Hypothesis」と呼ぶ (Conee 1984: 168)。

面識仮説が正しければ、メアリーの事例は物理主義に反さない仕方で記述されうる。メアリーは白黒部屋ですべての物理的事実の知識を得ていた。ここで物理主義が真である(それゆえあらゆるものが物理学的に記述されうる)と仮定しよう。この場合メアリーは、白黒部屋においてすでに、色経験の質 赤さや青さ に関する事実も知っていることになる。だが、ここがポイントであるが、彼女はこうした質を面識したことがない。というのも、白黒部屋の内部では、赤さなどの質は面識されえないからである。それゆえ、ジャクソンのストーリーによればメアリーは解放後に新しい「知識」を得るが、この「知識」は「面識知」という意味のそれである。面識は、定義により、事実的情報をもたらさないで、メアリーの知っている事実の総量は増加しない。

私はコウニーが《どのようなことかの知》を「ミニマルな仕方」で分析している点を強調したい。彼の《どのようなことかの知》は事実的情報も想起能力や再認能力も要求しない。それゆえ、極端な例を挙げると、外界をカメラで表象するだけのロボット(記憶装置などはもたない)ですら、この意味の《どのようなことかの知》を有しうる。《どのようなことかの知》をきわめて少ない要件で分析すること この点がコウニーの立場の特徴である。

う設定の知識論証を考察する(この種の知識論証は(著者)2008でも考察される)。

<sup>\*28</sup> この「acquaintance」はビゲロウ＝パーゲッターの「acquaintance」と区別される。後者は事実知を個別化するひとつのファクターであるが、前者は、すぐ後で見るように、事実知とはかかわらない。本稿はビゲロウ＝パーゲッターの「acquaintance」を「見知り」と訳し、コウニーのそれを「面識」と訳す。



面識仮説をコウニー以外で支持するひとは、私の知る限り、少ない<sup>\*29</sup>。しかし、それが正しいか否かは別として、コウニーが独特の反論を提示していることは事実であると言える。

(2) ウィリアム・ライカン・ライカンは、独自の表象理論に基づいて、1990年の論文で知識論証を批判する。彼の批判は旧事実/新様式戦略に分類されるが、その基本的なアイデアは《どのようなことかの知》を、特別な指示対象によって特徴づけるのではなく、機能<sup>\*30</sup>によって特徴づけるというものである (Lycan 1990: 125)。ライカンによれば、メアリーが部屋を出たとき、彼女は未知の対象について何かを知ったわけではなく、新しい機能をもつ表象を得ただけである (Lycan 1990: 120)。それゆえ、たとえメアリーが何かを学ぶとしても、物理主義に反する何かの存在が示されたわけではない。ライカンはこうした見解を 1995 年の論文でより洗練して提示する。以下、この論文に従い、ライカンの議論を確認しよう。

論文「現象的情報の限定的擁護」(Lycan 1995)の目標はルイス＝ネミロウの能力反論へ代替案を提示することである。ルイスは《どのようなことかの知》を命題内容あるいは情報内容を欠く方法知と分析した。ライカンはこの考えに反対する(この点はロアーと同様である)。ライカンによれば、《どのようなことか》は情報内容を有する。それゆえ能力分析は誤りであり<sup>\*31</sup>、これに基づく能力反論も正しくない。ライカンは《どのようなことか》から情報内容を剥奪しない知識論証批判が適切だと考える。しかし、もし《どのようなことか》が情報内容をもつならば、メアリーが解放後に新しい情報を得たことになる。そして、この情報がメアリーへ新しい事実を教えるならば、このことは物理主義を脅かす。ライカンは、この問題に対処するために(すなわち、メアリーの新しい情報と物理主義を衝突させないように)、二種類の「情報」概念を区別する。この区別は、彼の理論の枠組みの内部で、以下のように説明される。

ライカンによれば、知識とは知識をもつ主体(単純には知識主体)が彼の頭の中の情報に対して有する二項関係である。具体的に解説しよう。例えばギョームはジョルジュ・サンドが女性であると知っている。この事態をライカンは次のように記述する。

ギョームは●ジョルジュ・サンドが女性である●と知っている。

「●」は「セラーズ・ドット Sellarsian dot」と呼ばれ、このドットで挟まれた文は知識主体の頭の中にある特定の情報を指す。さて、ライカンによれば、知識の対象 セラーズ・ドット引用で指示される情報 はふたつの区別される側面をもつ。この情報は「真理条件 truth condition」をもつと同時に、知識主体の思考や行動を助ける「計算役割 computational role」を有する (Lycan 1995:

<sup>\*29</sup> Tye 2009 は面識仮説を支持する。他方面識仮説に対する批判は Alter 1998, Gertler 1999 などで提示される。例えばオルターは《どのようなことかの知》と面識が同一視されないケースが存在すると主張する。例えば、あるひとについてホログラム映像をとおして知る場合、《このひとがどのようなひとか》は知られるが、コウニーの言う意味の面識知は得られていない (Alter 1998: 38-40)。

<sup>\*30</sup> ここで「機能」とは表象が認識主体の推論や計算などにおいて果たす役割のことである。この点はすぐ後で説明される。

<sup>\*31</sup> ライカンは能力分析が間違いであることを示す(と彼が考える)根拠をいくつか挙げている (Lycan 1995: 244-249)。そのうちのひとつ 構文と意味に基づく反論 を紹介しておこう。ライカンは間接疑問文の疑問詞節が 'that' 節と意味おいても文法においても関連している点を指摘する。すなわち 'S knows wh-' は 'S knows that' と関連している。実際、'S knows where X Vs' が真であるのは、適切な 'p' について 'S knows that X Vs at p' が真であるときである。同様に、ライカンによれば、'S knows what it's like to see blue' は 'S knows that it is like Q to see blue' を意味する。ここで 'Q' は「内的な現象的性質 inner phenomenal property」を指し、後者の文の 'that' 節は一定の情報内容を表現する。ルイス＝ネミロウは、ライカン曰く、この情報内容を無視している。

252)。先の例においては、情報「●ジョルジュ・サンドが女性である●」は一方で《特定の人物が女性である》という真理条件をもつが、他方でこの情報はギョームの思考や推論の「歯車」にもなっている<sup>\*32</sup>。ここで重要なことはライカンの言葉を借りると真理条件と計算役割が「互いに独立である」という点である (Lycan 1995: 252)。とくに、同じ真理条件をもつふたつの情報が異なる計算役割を演じることがありうる<sup>\*33</sup>。このように、ライカンによれば、情報は異なる二側面を併せ持つ。それゆえ、彼の枠組みにおいては、情報を個別化する基準がふたつあることになる。そのふたつはもちろん真理条件で個別化する基準と計算役割で個別化する基準である。一般に、真理条件を基準とするより計算役割を基準とする方が、情報は細かく個別化される。それゆえライカンは、真理条件で個別化された情報を「粗い事実的情報 coarse-grained factual information」と呼び、計算役割で個別化された情報を「細かい計算的情報 fine-grained computational information」と呼ぶ。

ライカンはこのふたつの「情報」概念を用いてメアリーの事例を、物理主義に反さない仕方で、加えてメアリーが解放後に新しい情報を得たことを認める仕方で、分析する (Lycan 1995: 254)。その議論は今や明白である。メアリーは、解放後に、細かい計算的情報を新たに得た。すなわちメアリーは、例えば赤や青を実際に経験することによって、それまでできなかった推論や思考を行えるようになった。しかしメアリーは粗い事実的情報を新たに得ていない。それゆえメアリーの知っている事実の総量は増加していない。

ライカンの知識論証批判の特色は以下のように説明されうる。私たちの多くは、メアリーのストーリーを聞くと、《メアリーが解放後に何か新しい情報を得た》と考えてしまう。こうした考えは、何となくそう考えてしまうという意味で、「直感」と呼ばれうるかもしれない (この直感が正しいか否かは別にして)。ここで、いくつかの知識論証批判がこの直感を否定してしまうのに対して<sup>\*34</sup>、ライカンはこの直感を明快な仕方で救っている。それゆえライカンの立場は、他の幾人かの論者の見解に比して、より直感に合致すると言われうるかもしれない。ロバート・ヴァン・ガリックはライカンの立場を、「粗い命題 coarse-grained proposition」だけでなく「細かい命題 fine-grained proposition」も認める立場と特徴づけているが (Van Gulick 1992, 2004, 2009) こうした「細かい命題」あるいは「細かい情報」という道具立ては、メアリーに関して私たちが抱きうる直感を救うための明快なツールとして注目されうる。

(3) デイヴィッド・チャルマーズ。チャルマーズは有名な著書 (Chalmers 1996) で知識論証を擁護する。彼は、多くの論者の知識論証批判をとりあげ、それらがすべて誤りであると主張する。こうした再批判には興味深い議論が含まれるが、ここでは措いておこう。以下では二点とりあげたい。第一にチャルマーズが知識論証を擁護する際の独特の主張を紹介する。それは、知識論証はいわゆる「ゾンビ論証 zombie argument」とペアになったときに最も力を発揮する、という主張である。第二にチャルマーズによる物理主義の分類を紹介する。この分類は現在標準的なものになっており、

<sup>\*32</sup> 例えば、この情報はギョームに《ジョルジュ・サンドはヒステリックだったに違いない》と推論させるかもしれない (もちろんこの推論は偏見であるが)。

<sup>\*33</sup> 例えば「●グラスに水が入っている●」という情報と「●グラスに H<sub>2</sub>O が入っている●」という情報を考えられたい。

<sup>\*34</sup> ルイスやコウニーの応答およびチャーチランドの第三の批判はこの直感を否定してしまう。

多くの論者が採用している。まず前者から見てみよう<sup>\*35</sup>。

チャルマーズは知識論証を独自の仕方で形式化する (Chalmers 1996: 141-142; Chalmers 2004)。 $P$  をすべての正しい物理的情報、 $Q$  を色についての何らかの「現象的」情報とし、彼は知識論証を以下のように定式化する。

Pre1 白黒部屋でメアリーは  $P$  を知っており、かつ彼女は  $P$  から「論理的に導出されうる」情報をすべて知っているが、彼女は  $Q$  を知らない。

Pre2 物理主義が真であるならば、 $Q$  は  $P$  から論理的に導出されうる。

Conc よって物理主義は偽である。(Pre1 と Pre2 より)

チャルマーズによると、物理主義が正しい場合には、世界の物理的側面が確定すれば他のすべての側面も確定する。それゆえ、物理主義が正しい場合には、すべての物理的情報を知っているひとは、追加の情報なしに(この意味で「論理的に」あるいは「論理のみによって」)、他のすべての情報を導出しうる。したがって、メアリーが  $P$  を知りつつ  $Q$  を知らないという事態は《物理的側面によって決定されない側面が世界に存在すること》を示す。これに基づき知識論証は物理主義を棄却する。

他方でゾンビ論証はゾンビの存在可能性に基づいて物理主義を棄却する (Chalmers 1996: 94-99)。物理主義を次のようなテーゼを主張する立場と定義しよう。

(P) 任意の存在者  $a$  と  $b$  について、 $a$  と  $b$  が物理的 機能的に複製であるならば、 $a$  と  $b$  は端的に複製である。

すると、もし物理主義が真であるならば、 $X$  が私の物理的 機能的複製である場合、 $X$  と私は一切の違いを有さないことになる。他方で、チャルマーズによれば、私と物理的 機能的に複製でありながら意識を欠く存在者(これを「ゾンビ」と呼ぶ)は存在可能である。なぜなら、彼によれば、可能世界の中に次のような「ゾンビ世界 zombie world」が存在するからである。このゾンビ世界は私たちの現実世界と物理的 機能的に複製であるが、しかしここには意識をもつ存在者がいない。とくに、この世界には私と物理的 機能的に複製である存在者がいるが、しかし彼(それ?)は意識をもたない。彼は私のゾンビ複製である。こうしたゾンビの存在は物理主義を棄却する。というのも私と私のゾンビ複製は(P)に対する反例となるからである。

このゾンビ論証を形式化すると次のようになる。

Pre1 ゾンビ世界が存在する。

Pre2 物理主義が真であるならば、ゾンビ世界は存在しない。

Conc よって物理主義は偽である。(Pre1 と Pre2 より)

ある見方によればゾンビ論証は、「 $P$  を知っている」という内包的な概念を用いない点で、知識論証よりも強力である。知識論証に関しては、たとえメアリーが解放後に何かを知るとしても、旧事実/新様式戦略によって物理主義を守りうるかもしれない。しかしながら、ゾンビ論証に関しては、

<sup>\*35</sup> 以下における、チャルマーズによる知識論証の定式化の紹介、物理主義の定義、ゾンビ論証の説明などはインフォーマルなものである。Chalmers 1996 や Chalmers 2004a などでも正確な議論を確認されたい。

ゾンビの存在可能性はそれだけで物理主義を棄却するように思われる。この意味でゾンビ論証は知識論証よりも「根本的」である (Chalmers 1996: 140)。それゆえチャルマーズによれば、すぐ後で述べるように、メアリーの事例が文句なしに物理主義を反駁するためには、メアリーの事例を出発点にしてゾンビ論証 (に類する論証) を展開するのが最良の道である (Chalmers 1996: 140)。

チャルマーズはゾンビ論証とメアリーの事例が「一枚のコインの両面」であると言う (Chalmers 1996: 145)。なぜなら、曰く、これらふたつを一緒にすると、一方に助けが必要などころでは他方が援助するからである。その論証は以下である。ゾンビ論証は意識が世界の物理的・機能的側面からはみ出すことを前提する (さもなければゾンビ世界は存在しえない)。この前提を正当化する際にメアリーの事例は役立つ。なぜなら、先にも述べたように、メアリーの事例は《物理的側面によって決定されない側面が世界に存在すること》を「説得的に」示すからである (Chalmers 1996: 146)。他方でメアリーの事例が示す事態、物理的・機能的側面からはみ出す何かが存在すること、は、「知識」などの認識論的概念を用いる文脈を離れ、「可能世界」や「複製」概念を駆使したゾンビ論証を経由してこそ「説得的に」物理主義を否定する。ある論者はチャルマーズの議論を次のように要約する (McGeer 2003: 387)。すなわち、メアリーの事例は議論の基礎となる「データ」を与え、ゾンビ論証はこのデータから物理主義を棄却する「推論」を展開する、と。

知識論証のこうした位置づけが正しいかどうかは議論があると思われる。加えてチャルマーズ自身も知識論証が「原理的には単独でも力を発揮する」と認めている (Chalmers 1996: 145)。さらに、私も知識論証が単独で吟味されるに値すると考えるので、この論証が正しいか否かは別として、本稿はこれまでどおりメアリーの事例をゾンビ論証とは独立に考察する。とはいえ《知識論証とゾンビ論証の提携》というアイデアが興味深いものであることは言うまでもない。

第二にチャルマーズの分類である。彼は「意識」に関する哲学的見解を三つのグループへ分け、それらをそれぞれ「タイプ A」、「タイプ B」、「タイプ C」と呼ぶ (Chalmers 1996: 165-168)。内実は以下である。

タイプ A は意識の還元的説明を認める物理主義である。この立場は、知識論証に関しては、メアリーが解放後に新たな情報を得ないと考える。例えばチャーチランドの第三の反論、ルイス＝ネミロウの能力反論、コウニーの面識仮説などがタイプ A に分類される。

タイプ B は意識の還元的説明を認めない物理主義である。言い換えればタイプ B は、たとえ現象的知識が物理的知識から論理的に導出されないとしても、存在論的な物理主義は成立すると主張する。この立場は、知識論証に関して、旧事実/新様式戦略を採用する。例えばチャーチランドの第一の反論やビゲロウ＝パーゲッター、ロアー、ライカンらの立場はタイプ B に属す。

タイプ C は二元論である。この立場は知識論証が物理主義を棄却すると考える。ジャクソンとチャルマーズの見解がタイプ C に属す。

私はタイプ A と B の区別が物理主義をふたつに分ける便利な基準である点を強調したい。この点は知識論証をめぐる議論に参加する論者の多くが認めている。この論証に関して言えば、《はたしてメアリーは、解放後に、新しい情報を得るか》は重要な争点であるので、タイプ A と B の区別は自然であり有意味である。タイプ A と B は、同じ物理主義でありながら、意見を対立させる。それゆえ知識論証をめぐる論争は、物理主義 vs 二元論という単純な対立としてのみならず、タイプ A と

B と C の三つともえの戦いとしても理解されるべきである。以下では、必要に応じて物理主義を細分化し、「タイプ A 物理主義 type-A physicalism」と「タイプ B 物理主義 type-B physicalism」という表現を用いたい。

先に述べたようにチャルマーズは知識論証を擁護するが、このスタンスは現在も変わらない。他方で、すぐ後で述べるように、ジャクソンは知識論証が間違っているという立場へ「改心」する。それゆえ、現在においては、チャルマーズが知識論証の代表的支持者になったと言えるだろう。

### 2.3 ジャクソンの改心と第3期の論争

ジャクソンは立場を変えた。ある論者 (Robinson 2002) はこれを「背教」と表現しさえした。ストルジャーとナガサワの報告によると、ジャクソンの「改心」はたちまち哲学界におけるニュースになり、例えば *Philosophy News Service* 誌で「ジャクソンは今や物理主義者である」と報じられた (Stoljar and Nagasawa 2004: 28)。実際、1998 年に公表された掌編においてジャクソンは自分が物理主義者になったことを表明し、知識論証が間違いであると述べる。

「改心」の過程は、彼自身の回想によると、次のように進化した (Jackson 2009: 437)。ジャクソンは知識論証がクオリアに関する随伴現象説を帰結すると考えていた。だが、多くの哲学者との議論の末、彼は随伴現象説が擁護不可能であると信じるようになった<sup>\*36</sup>。このことによってジャクソンは知識論証がどこか間違っているという考えに至った。だが、正確にどこが間違いなのかという点については、ジャクソンはしばらく確固たる答えを見い出せずにいた。しかし、その後、彼はある見解へたどり着いた。その見解をおし進めてジャクソンは、いくつかの論文 (Jackson 2002, 2007) において、いわゆる「表象主義」に基づく知識論証批判を提示する。

他方で、ジャクソンが知識論証を放棄しても、この論証をめぐる論争が終わることはなかった。現在も多くの哲学者がメアリーの事例をめぐる議論を戦わせている。以下では、まずジャクソンの新しい見解を紹介し、その後で近年における論戦の展開を確認しよう。

(1) フランク・ジャクソン・ジャクソンが「転向」以降に公表した論著のうちで、知識論証に関する彼の現在の見解を知るために重要なものは 1998 年の掌編および 2002 年と 2005 年と 2007 年の三本の論文である。1998 年の掌編はジャクソンが知識論証を放棄することを初めて表明する (この掌編における彼の議論はまだ洗練されていない)。2002 年の論文は、掌編の議論を発展させ、「表象主義」に基づいて知識論証を批判する。2005 年と 2007 年の論文は表象主義を正当化する新たな論証を提示して 2002 年の論文の議論をサポートする。以下では 2002 年の論文からジャクソンの知識論証批判の要点を抽出しよう。

論文「心と錯覚」(Jackson 2002) によれば「表象主義 Representationalism」<sup>\*37</sup>は次のふたつの課題を果たす。

( $J_1$ ) 知覚経験 (とくに色経験) の本性を物理学的に説明するための枠組みを提供する。

<sup>\*36</sup> ストルジャーとナガサワによると、こうした見解の変化は 1993 年より後に、そして 1996 年までに、生じたい (Stoljar and Nagasawa 2004: 231)。彼らはその根拠を述べていないが、何らかの証拠があるであろう。

<sup>\*37</sup> これは「志向主義 Intentionalism」や「表象説 Representational Theory」などと呼ばれることがある (ただし Jackson 2005 は「表象主義」と「志向主義」を区別して用いる)。

( $J_2$ ) 《なぜ私たちはメアリーが解放後に新しいことを学ぶと感じるのか》を説明する。

もし表象主義が( $J_1$ )を果たすならば、表象主義は知識論証が物理主義を棄却するのをブロックする。もし表象主義が( $J_2$ )を果たすならば、表象主義は私たちが知識論証を正しいと考えてしまうことの理由を説明する。それゆえ、ジャクソンの考えが正しければ、表象主義を採用すれば知識論証は徹底的に棄却される。

表象主義は次のテーゼを主張する立場として定義される (Jackson 2002: 428-429)。

心的状態の本性は表象内容によって完全に規定される。

表象主義は心的状態の本性に関するテーゼである。この立場が( $J_1$ )と( $J_2$ )を果たす理由はそれぞれ以下である。

( $J_1$ )について。はじめに大枠を押さえよう。一般的に言う「心的状態 mental state」は三つのカテゴリーに分類される。それは信念や欲求などの「態度 attitude」、視覚や聴覚などの「知覚 perception」、痛みや吐き気などの「感覚 sensation」である。ここで、態度については有望な物理学的説明の方針がすでに存在するのに対して、知覚や感覚は物理学的に説明するのが難しい(あるいは不可能)とされる。しかし、ジャクソンによれば、表象主義を認めるならば知覚や感覚も態度と同じ方針で説明されうる。すなわち、表象主義を認めれば、態度を物理学的に説明する方針が知覚や感覚にも適用可能になる。

詳しく見てみよう<sup>\*38</sup>。例えば信念という態度の物理学的な説明の過程は次のように図示される。

信念の本性  $\xleftarrow{\text{det}}$  表象内容  $\xleftarrow{\text{det}}$  物理的なもの

説明はふたつのステップから成る。第一に信念の本性はその「表象内容 representational content」によって規定される。表象内容とは「事物がどのようにあるか how things are」を表すものである<sup>\*39</sup>。ここで注意すべきは表象内容が「志向的 intentional」である点である。信念の表象内容の「志向性」は文や地図の「志向性」と類比的に理解されうる (Jackson 2002: 429)。「あの猫は白い」という文の表象内容は、この文がどのような媒体で書かれているかとは独立に、事物のあり方<sup>\*40</sup>を表現する。信念についても同様である。信念の表象内容は、その信念がどのような媒体 そんなものがあるとして で構成されているかとは関係なしに、事物のあり方にかかわる。第二に信念の表象内容は、機能主義的な分析に従い、物理的なものによって規定される<sup>\*41</sup>。かくして、信念の本性はその表象内容で規定され、後者は物理的なものによって機能主義的に規定されるので、信念の本性は物理的なものによって規定されることになる。他の態度も同様の仕方で物理的なものによって規定される。

だが知覚や感覚が同じ仕方で物理的なものによって規定されることはない 多くのひとはこう

<sup>\*38</sup> 以下の説明は、ジャクソンのテキストに加えて、Bigelow and Pargetter 2006: 354-355 や Pettit 2009: 168-176 を参照した。

<sup>\*39</sup> 例えばタイラーがグラスに水が入っていると信じているとき、この信念の内容は《グラスに水が入っている》という事物のあり方を表す。

<sup>\*40</sup> 現実的なあり方である必要はない。

<sup>\*41</sup> 例えば、《グラスに水が入っている》という内容の信念をもつことは、環境からの特定のインプットに対し特定のアウトプットを返す行動傾向性として分析される。

考える。その根拠は知覚や感覚がクオリアを有する（と考えられる）ことである（他方で態度はクオリアをもたないとされる）。彼らによれば、知覚や感覚はクオリアを有するため、その本性が表象内容によって規定されない。例えばあるひとが赤いリンゴを見るとき。彼女の視覚は、《赤いリンゴが存在する》という事物のあり方を表す表象内容に加えて、赤さというクオリアを含む。赤さのクオリアは表象内容と独立である。なぜならひとは青さのクオリアによっても《赤いリンゴが存在する》という事態を表象することもできたからである<sup>\*42</sup>。したがって多くのひとは以下のように言う。知覚は表象内容に加えてクオリアを含むため、知覚の本性は表象内容によって完全には規定されない。それゆえ、たとえ知覚の表象内容が機能主義的に物理的なものによって規定されうとしても、知覚の本性の全体が物理的なものによって規定されることはない。感覚についても同様である<sup>\*43</sup>。

ジャクソンはこの議論に反対する。この議論は《知覚が表象内容に加えてクオリアももつ》と主張するが、ジャクソンによればこれは間違いである。なぜなら、曰く、表象主義が正しいからである。この立場は 先の定義によると すべての心的状態の本性が表象内容によって規定されると主張する。知覚も例外ではない。したがって、表象主義が正しいならば（ジャクソンは正しいと考えるが<sup>\*44</sup>）知覚の本性もその表象内容によって汲み尽くされる。感覚についても同様である。

ここからジャクソンの議論は次のように進む。一方で すぐ前で見られたように 知覚も感覚もその本性が表象内容によって規定される。他方で、表象内容は機能主義的なやり方で物理的なものによって規定されうる（この点は信念に関して確認された）。それゆえ、知覚と感覚の本性も同様のやり方で物理的なものによって規定される。このように、表象主義を認める場合には、すべての心的状態は物理的なものによって規定される。このことは表象主義が（ $J_1$ ）を果たすことを意味する。

（ $J_2$ ）について。もし物理主義が正しく、心的状態の本性が物理的記述から導出されるのであれば、なぜ解放後のメアリーが新しい何かを学ぶと感じられるのか。この問いへジャクソンは、表象主義の枠組みに基づき、進化論的解答を与える。表象主義は心的状態が表象内容や機能によって説明されると主張する。それゆえ、表象主義の枠組みに基づけば、以下のような「表象 機能ベース」の進化論的ストーリーが擁護可能になる。

実生活で何度も出会われるパターンを素早く察知する能力は生存のために本質的である。そして、例えば、近づいて来るのが親友か腹をへらしたトラかを判別するためには、共通特性 commonality [ すなわち、特定のタイプに属するものが共通してもつ特性 ] を認識する必要がある。ある特性は目立っているが [ ... ] 別の特性は目立っていない。[ ... ] もし色視覚が食物を発見する助けとして進化したという説が正しいならば、色視覚が進化した理由はまさに、可食

<sup>\*42</sup> いわゆる「逆転スペクトル inverted spectrum」の状況を想像されたい。ちなみに、ここら前後の記述は赤さのクオリアと対象の物理的な赤さを区別して読まれたい。

<sup>\*43</sup> 感覚と表象内容をめぐっては別種の問題があるが、この点は本稿では措いておきたい。

<sup>\*44</sup> 表象主義の根拠をジャクソンは Jackson 2002: 429-430 でふたつ挙げる。そのひとつは以下である。ジャクソンはクオリアが表象内容につけ加えられるプラス・アルファでないと主張する。彼によれば、クオリアは表象内容の一部である。なぜならクオリアに変化があるときは、表象内容に必ず変化があるからである（例えば、ジャクソン自身の例であるが、知覚の赤クオリアが若干明るくなると、その知覚は《ある対象の赤さが若干赤くなる》という事態を表象する）。それゆえ知覚や感覚のクオリアはその表象内容を超えない。

物がもつほとんど目立たない複雑な光学的共通特性、および背景である森林の光学的特性との差異、などを発見するためであったと言える。さて、光学的共通特性のようなほとんど目立たない特性は、通常、多くの情報を集約した後ではじめて発見される。それゆえ色経験は、このようにほとんど目立たない関係的 機能的情報を異例なほど「素早く」獲得する手段であると言える。この点に関する限り、色経験は、内在的性質 *intrinsic property* に関する情報を教える表象に似ている。[ ... ] その結果、色経験は、まるで [ ... ] 内在的性質に関する情報を獲得する手段であるかのように感じられる。他方で、こうした内在的性質に対応する物理的性質を探したとしても、決して見つからない。このため、色経験は非物理的性質に関する情報を提示するものであるように考えられる。( Jackson 2002: 433 四角括弧内補足は引用者による )

まとめると以下ようになる。色経験は、進化論的な理由によって、複雑な関係的 機能的性質に関する情報を素早く伝える。その《素早さ》は、形などの単純な内在的性質に関する情報が獲得される際の《素早さ》に匹敵する。そのため色経験は何らかの内在的性質について語っているように感じられる。他方で、こうした内在的性質に対応する物理的性質は存在しない（他方で色経験が語る関係的 機能的性質には対応する物理的性質が存在する）。その結果、色経験が非物理的な何かについて語っていると勘違いされる。このストーリーはなぜ私たちが知識論証を正しいと感じるのかを説明する。すなわち、メアリーが色を見たとき非物理的な何かを知ると感じるのは、関係的 機能的性質を内在的性質と取り違えたためである、と。

もちろん表象主義が正しいかどうかには議論がある。また、たとえそれが正しいとしても、表象主義がジャクソンの主張するように ( $J_1$ ) と ( $J_2$ ) を果たすかどうかにも議論がある。例えばビッグelow＝パーゲッターは、心的状態が非表象的性質をもちうると指摘し、表象主義が偽であると主張する ( Bigelow and Pargetter 2006: 363-368 )。またオルターは表象主義の真偽と知識論証の是非が無関係であると主張する ( Alter 2007 )。いずれにせよジャクソンの見解が活発な議論を呼んでいる点は確かである。ジャクソンの再反論や表象主義をあらためて擁護する論証は彼の 2005 年と 2007 年の論文に見出される。

最後に、知識論証をめぐる論争におけるジャクソンの立場の位置づけを押さえておこう。ジャクソンはメアリーが解放後に新たな情報を得ないと考え。それゆえ彼の立場はタイプ A 物理主義へ分類される。加えてジャクソンは、ルイス＝ネミロウに同意し、解放後のメアリーが能力を得ると考える ( Jackson 2002: 438-439 )。すなわち、ジャクソンによれば、解放後のメアリーは未体験だった表象状態に立つことになるが ( もちろんジャクソンによれば彼女はこの状態の本性を知っていた ) この経験はメアリーへ ( 事実知ではなく ) 一定の能力を与える。ジャクソンは表象主義が能力反論の基礎づけをする点を強調する ( Jackson 2002: 439 )。かくしてジャクソンは知識論証に対して表象主義に基づく能力反論で応答すると言えよう。

( 2 ) ロバート・ヴァン・ガリック . ヴァン・ガリックは知識論証に対する可能な応答の「分類学」へと組んでいる。彼の分類法は明快かつ自然であるため、多くの論者がそれに従う。その分類法はもともと 1992 年の論文で公表されたが、より洗練されたヴァージョンが 2004 年や 2009 年の論文で提示される。以下では彼の洗練された分類法を 本稿の叙述に合うように若干変更して紹介しよう。この分類法は、後で紹介される近年の知識論証批判の「トレンド」の特色を理解



するのに便利である。

ヴァン・ガリックによれば知識論証に対する応答は以下の問いへの回答を基準に分類されうる (Van Gulick 2004: 370)。

- Q1. メアリーは解放後に何らかの知識を得るか。
- Q2. メアリーは解放後に何らかの事実知を得るか。
- Q3. メアリーは解放後に何らかの新しい情報を知るか。
- Q4. メアリーは解放後に新たな事実についての情報を知るか。

問いの順序に工夫がある (この点はすぐに理解される)。さて、知識論証をめぐる論争への参加者たちが Q1 から Q4 の問いへ答えるとしよう。すると事態は次のように進行する。

(Q1) メアリーは解放後に何らかの知識を得るか。この問いへ「ノー」と答えるのはチャーチランドの第三の反論である。この反論は白黒部屋のメアリーが「読譜」のような仕方で赤色を想像しうると主張した。この反論によればメアリーは解放後にいかなる意味でも新しい知識を得ない。また、本稿では触れられないが、デネットも Q1 へ「ノー」と答える (Dennett 1991, 2007)。Q1 へ「イエス」と答える論者たちが Q2 へ進むとしよう<sup>\*45</sup>。

(Q2) メアリーは解放後に何らかの事実知を得るか。この問いへ「ノー」と答えるのはルイス＝ネミロウとコウニーである。ルイス＝ネミロウはメアリーが方法知を得たと主張し、コウニーは彼女が面識知を得たと主張する。いずれもメアリーが事実知あるいは命題知を得たと考えない。Q1 へ「イエス」と答えた論者のうち、ルイス＝ネミロウやコウニーらのいわゆる「非 命題知説」<sup>\*46</sup>の提唱者以外は Q2 へ「イエス」と答え、Q3 へ進む。

すぐに気づかれるように Q1 あるいは Q2 に「ノー」と答える論者はタイプ A 物理主義者である。そして、Q3 以降へ進む論者はタイプ B 物理主義者か二元論者である。Q3 はふたつのタイプの旧事実/新様式戦略を区別する問いである。

(Q3) メアリーは解放後に何らかの新しい情報を知るか。この問いへ「イエス」と答えるのは、例えば、ライカンやロアーである。ライカンは、細かい計算的情報の存在を認め、メアリーが解放後に情報を得たと主張する。ロアーも、現象概念戦略に基づき、ある種の「現象的な」情報の存在を認める (Loar 1990: 86)。他方でビゲロウ＝パーゲッターの見解やチャーチランドの第一の反論が Q3 へ「イエス」と答えるか「ノー」と答えるかは明確でない (おそらくこれらの立場はそもそも図式的であり、詳細まで規定されていない)。Q3 へ明確に「ノー」と答えるのは (本稿では触れられなかったが) ペルチャーである (Pelczar 2005)。ペルチャーによれば知識論証への正しい応答は、メアリーが事実知を得たことを認めると同時に彼女がいかなる意味でも新しい情報を得ていないと考える立場である (Pelczar 2005: 38-40)。さて、ペルチャー (および彼に類する見解の持ち主) が Q3 でストップするのに対し、二元論者およびライカンやロアーなどは Q4 へ進む。

(Q4) メアリーは解放後に新たな事実についての情報を知るか。この問いへライカンやロアーは

<sup>\*45</sup> 容易に気づかれるように、Q1 へ「ノー」と答える論者はその後の Q2 から Q4 のすべてへ「ノー」と答えることになる。同様のことが Q2 や Q3 にも成立する。

<sup>\*46</sup> この用語は北野 2008: 155 で用いられている。

「ノー」と答える。彼らは、たとえメアリーが新たな情報を知ったとしても、それが新たな事実に関する情報であるとは考えない。チャルマーズやかつてのジャクソンのような二元論者は Q4 へ「イエス」と答える。

このように Q1 から Q4 は論者たちの見解を首尾よく分類する。これらの問いは本稿がこれまでとりあげた立場の争点を明確化する。しかし、論争の近年の動向に顧みると、Q1 から Q4 では足りない。ヴァン・ガリックによれば次の Q0 と Q5 が必要である (Van Gulick 2004: 400-403)。

Q0. 解放前のメアリーがすべての物理的事実を知ることは可能であるのか。

Q5. メアリーが解放後に新たな事実についての情報を得た場合には、物理主義は必ず棄却されるのか。

ヴァン・ガリックはある種の物理主義者が Q0 へ「ノー」と答えることによって知識論証を棄却しうると言う。加えて、ある種の物理主義者が Q5 へ「ノー」と答えることによって知識論証を棄却しうるとも言う。彼は Q0 と Q5 の両方へ「ノー」と答える物理主義にシンパシーを感じている。その立場の内実は次のようなものである。

ヴァン・ガリックの好む物理主義は解放後のメアリーが「主観的な物理的事実 subjective physical fact」を知ったと主張する (Van Gulick 2004: 389-391)。この事実は物理的であるので、その存在は物理主義に対する脅威にならない。他方で、この事実は《特定の経験的視点のみから理解される》という意味で「主観的」であるので、この事実を知るためには特定の経験を得なければならない。それゆえメアリーは白黒部屋では、必要な体験を欠くために、色に関する主観的事実を知らなかった。この物理的事実をメアリーは解放後にはじめて知る。こうした見解は Q0 へも Q5 へも「ノー」と答える。

Q0 から Q5 を用いて知識論証への反論を分類し図示すると次のページのようになる。表に登場しない論者がどの立場と見なされるかについては注<sup>\*47</sup>で述べておく。この分類は争点をつかむのに便利である。例えば、Q0 を無視して Q1 から Q5 へ注目すると (例えばペンで Q0 の行を隠されたい)、どの問いまで「イエス」と答えるかが、二元論的な発想へどれだけ「妥協」しているかのバロメーターになる。

<sup>\*47</sup> View1 には、後でも触れるように、Conee 1985, Harman 1990, Alter 1998, Crane 2003, Hellie 2004, Horowitz and Jacobson-Horowitz 2005, Kallestrup 2006, Howell 2007, Montero 2007, Nagasawa 2008 などが属す。Stoljar 2001 の立場も解釈によっては View1 に属す (ストルジャーの見解は北野 2008 で紹介されている)。

View2 には、ヴァン・ガリックによれば、色の哲学で有名なハーディンが含まれるらしい (ヴァン・ガリックは C. L. Hardin 1988, *Color for Philosophers*, Indianapolis: Hackett を参照しているが、それらしい記述は 私が探した限り 見つからない)。

View3 には、能力反論の支持者 (ここには近年のジャクソンも含まれる) あるいは面識仮説の支持者が含まれるが、それ以外では例えば Foss 1989 が属す。フォスは、たとえメアリーが解放後に何かを知るとしても、「認知的価値 epistemic interest」をもつものは何も知られていないと言う (Foss 1989: 217)。つまり、事実の知識は得られていない、ということである。

View4 にはひょっとしたら Horgan 1984 や Bigelow and Pargetter 1990 が属すかもしれない (これは解釈に依存する)。だが Tye 1986 は十中八九属すと思われる。タイは、この論文では、どのようなことかの知を体験知と事実知に分解し、白黒部屋のメアリーが事実知を得ているが体験知を得ていないとする。また これも解釈によるが ビゲロウ＝パーゲッターの「見知り関係」を「指標的關係」と捉える論者 (McMullen 1985, Perry 2001 など) も View4 へ数えうるかもしれない。

View5 には現象概念戦略の採用者が属す。そして View6 には二元論者 (かつてのジャクソンや Robinson 1993 など) が属す。

	View1 V. G.	View2 Churchland Dennett	View3 L.-N. Conee	View4 Pelczar	View5 Lycan Loar	View6 Chalmers
Q0. 物理学的全知？	×					
Q1. 解放後に何か知った？		×				
Q2. 事実知を得た？			×			
Q3. 新しい情報を得た？				×		
Q4. 新しい事実を知った？					×	
Q5. 物理主義は棄却？	×					

まとめよう。知識論証をめぐる論争へのヴァン・ガリックによる貢献は第一に反論の明快な分類法を提案したことにあると言える（この分類法はストルジャーとナガサワによる知識論証の紹介<sup>\*48</sup>でも参考にされている）。他方で、彼の好む立場（図の View1）は近年の論争における「トレンド」になっている。この点については項をあらためて論じたい。

（３）近年の流行：知識論証をめぐる論争の最近の動向のうち特筆すべきことは、かつてマイナーであったアプローチの流行である。このアプローチはメアリーが白黒部屋ですべての物理的知識を得ていなかったと主張する。この主張は知識論証をブロックする。というのもこの主張は論証の前提のひとつ 1.1 での定式化における Pre1 を否定するからである。このような仕方では知識論証から物理主義を守る戦略を本稿は「新事実戦略 New Fact Strategy」と呼びたい。なぜなら、このアプローチによれば、メアリーは解放後に新たな事実を知るからである。また、これを「戦略」と呼ぶのは、いくつかの区別されるヴァージョンが存在するからである。新事実戦略はコウニーの 1985 年の論文やハーマンの 1990 年のそれで採用されているが<sup>\*49</sup>、つねにマイナーであった。だが、近年ではオルターやナガサワなどの代表的な「知識論証研究者」がこの立場を推奨している。以下では、新事実戦略にまつわる近年の動向を概観しよう。

オルターはある論文（Alter 1998）において、おそらくコウニーやハーマンの業績を意識せず、知識論証に対する「新しい」反論として新事実戦略を提案した。これが現在 つまり本稿が書かれている 2009 年 まで続いている「トレンド」の始まりである。オルターの論述は抽象的であるため、新事実戦略のいわば「抽象的図式」を提示していると解釈されうる。その議論は以下である。

まずオルターは「物理主義」概念にふたつの独立したテーゼが結びつけられてきた歴史的事実を指摘する。そのテーゼは次のふたつである（Alter 1998: 49-50）。

（P）心的なものに関する事実は物理的事実である。

（DL）物理的事実はすべて「論述によって学ばれうる discursively learnable」。

（P）は物理主義の核となる発想である。また（DL）は、知識論証において、白黒部屋のメアリーがすべての物理的事実を学ぼうという考えをサポートする。多くの物理主義者は、事実として、両

<sup>\*48</sup> Stoljar and Nagasawa 2004: 16-21.

<sup>\*49</sup> コウニーは、物理学的な術語では表現されえない物理的質が存在すると主張し、メアリーが白黒部屋でこの種の質を知りえなかったとする（Conee 1985: 301-302）。ハーマンは、例えば色が見えないひとには知りえない機能的事実が存在すると主張し、メアリーがこの種の事実を知らなかったと言う（Harman 1990: 45）。ちなみにコウニーは 1994 年の論文で面識仮説を採用するので、彼は立場を変えたことになる。

方のテーゼを認めてきた。それゆえ彼らは、知識論証へ反論する際、メアリーが解放後に新たな事実を学ぶという点を否定する必要があった。だがし、オルターによれば、(P)と(DL)が「物理主義」の名のもとに互いに結びつけられてきたのは歴史的偶然に過ぎず、「イデオロギー的な」ことに過ぎない(Alter 1998: 51)。そして、曰く、(DL)は物理主義に不可欠の要素ではない。それゆえ(DL)を否定することによって知識論証へ反論するという戦略も可能である。すなわち、白黒部屋で論述によって学ばれない物理的事実が存在するので、解放後のメアリーが新たな事実を知ることとは物理主義に反さない、と主張するわけである。

オルターの提案は新事実戦略の図式である。「論述によって学ばれない物理的事実」が何であるのかという点でいくつかのバージョンが分かれる。例えばホロヴィッツとジェイコブソン　ホロヴィッツは、いわゆる「高レベルの性質 higher-level property」が基礎物理的性質と対応するパターンがきわめて複雑である可能性を指摘し、こうした高階の性質が基礎的な性質から論述によって導出されないと主張する(Horowitz and Jacobson-Horowitz 2005: 55-61)。またクレインやハウエルおよび先述のヴァン　ガリックは、実際に経験せずには知ることのできない「主観的事実」の存在を指摘し、メアリーが白黒部屋でこの主観的事実を知らなかったとする(Crane 2003, Howell 2007: 149)。またナガサワは、物理学的理論によっては原理的に捉えることのできない物理的事実の存在を指摘し、メアリーが白黒部屋で学ぶうる知識に限界がある点を強調する(Nagasawa 2008: 140-142)。いずれの論者もメアリーが解放後に新たな事実を知ったことを認め、このことが物理主義に反しないと主張する。

新事実戦略は、ヴァン・ガリックの分類図からも分かるように、知識論証に対する独特な応答のひとつである。ところで新事実戦略がタイプA物理主義とタイプB物理主義のどちらに属するかという問いは答えるのが難しい。というのも新事実戦略は、タイプAもBも認めない事実　ある種の「主観的事実」　を認めるからである。新たな分類カテゴリーが必要かもしれない。

もちろん新事実戦略には批判がありうる。例えば、新事実戦略の認める「論述によって学ばれない事実」が本当に物理主義を棄却しないかについては、異論があるだろう<sup>\*50</sup>。例えば、白黒部屋ですべての物理的事実が「ア・プリオリ」に知られると考える物理主義者<sup>\*51</sup>にとっては、新事実戦略は採用可能なオプションでない。「ア・プリオリ物理主義」vs 新事実戦略という対立も今後の論争における重要な軸になると思われる。

## 2.4 結語：今後の展望

ここまで、論争の歴史を通覧してきた。論戦はまだ継続中であり、今後も多くの論文が書かれると予想される。以下では、本稿のサーヴェイを踏まえて、今後論じられるであろう(あるいは論じられるべき)トピックをいくつか指摘したい。

私に思いつくトピックは以下である<sup>\*52</sup>。

<sup>\*50</sup> こうした批判に対しては Kallestrup 2006: 15-16 や Nagasawa 2008: 142 に応答がある。

<sup>\*51</sup> 代表格はジャクソン、デネット、ルイスである。

<sup>\*52</sup> これらに次のふたつが加えうるかもしれない。それは知識論証と随伴現象説の関係をめぐる話題および知識論証とゾンビ論証の関係をめぐる話題である。前者は Watkins 1989, Stjernberg 1999, Campbell 2003 など、後者は Sommers 2002, McGeer 2003 など論じられている。

( 1 ) ジャクソンの表象主義に基づく知識論証批判は妥当か？ ジャクソンは表象主義が正しいければ知識論証は棄却されると主張する。しかし、表象主義は知識論証をブロックするのか。そもそも表象主義は正しいのか。

( 2 ) 物理主義者は新事実戦略を採用しうるのか？ 新事実戦略は白黒部屋で知りえない事実の存在を認める。だが、この事実はそれ自体で物理主義の反例とならないのか。そのような事実の本性は何か。

( 3 ) 知識論証へ適切に反論しているのはタイプ A 物理主義とタイプ B 物理主義のどちらであろうか？ タイプ A 物理主義者は解放後のメアリーが新しい情報を何も得ないと言う。これに対してタイプ B 物理主義者は解放後のメアリーが新しい情報を得たが新しい事実を知ったわけでないとする。どちらが正しいのか。あるいはどちらも間違っているのか。

( 4 ) 現象概念戦略は知識論証へ適切な反論を与えているか？ この戦略は、「現象概念」という特殊な概念へ言及することを通じて、物理主義へ応答する。だが現象概念とは何か。物理主義者は現象概念を用いて知識論証をブロックできるのか。

私はこれらの話題について言われうることがまだ多く残されている点を強調したい。これは国内においても海外においてもそうである。今後も、国の内外を問わず、新たな視点に基づく新たな見解が多く現れることを期待したい。最後に、ライカンの印象的な言葉を引いておこう。

いつか「知識論証」に関する論文がもはや書かれなくなる日がやって来る。これは疑いない。だが、宇宙の熱死のどのくらい前にその日がやって来るかについては、定かではない。( Lycan 2003 )

同感である。知識論証をめぐる論争はまだしばらく続くはずである。

## 参考文献

- [1] Alter, Torin, 1995. "Mary's New Perspective," *Australasian Journal of Philosophy*, 73: 582-584.
- [2] Alter, Torin, 1998. "A Limited Defense of the Knowledge Argument," *Philosophical Studies*, 90: 35-56.
- [3] Alter, Torin, 2001. "Know-How, Ability, and the Ability Hypothesis," *Theoria*, 67: 229-239.
- [4] Alter, Torin, 2007. "Does Representationalism Undermine the Knowledge Argument," in Alter and Walter: 65-76.
- [5] Alter, Torin and Sven Walter (eds.), 2007. *Phenomenal Concepts and Phenomenal Knowledge*, Oxford: Oxford University Press.
- [6] Balog, Katalin, 1999. "Conceivability, possibility, and the mind-body problem," *Philosophical Review*, 108: 497-528.
- [7] Beaton, Michael, 2005. "What RoboDennett Still Doesn't Know," *Journal of Consciousness Studies*, 12: 3-25, available at <http://ase.tufts.edu/cogstud/papers/Beaton2.htm>.
- [8] Bigelow, John and Robert Pargetter, 1990. "Acquaintance with Qualia," *Theoria*, 61: 129-147.

- [9] Bigelow, John and Robert Pargetter, 2006. "Re-Acquaintance with Qualia," *Australasian Journal of Philosophy*, 84: 353-378.
- [10] Campbell, Neil, 2003. "An Inconsistency in the Knowledge Argument," *Erkenntnis*, 58: 261-266.
- [11] Chalmers, David, 1996. *The Conscious Mind*, Oxford: Oxford University Press.
- [12] Chalmers, David, 2004a. "Imagination, Indexicality, and Intensions," *Philosophy and Phenomenological Research*, 68: 182-190.
- [13] Chalmers, David, 2004b. "Phenomenal Concepts and the Knowledge Argument," in Ludlow, Nagasawa and Stoljar: 269-308.
- [14] Chalmers, David, 2007. "Phenomenal Concepts and the Explanatory Gap," in Alter and Walter: 167-194.
- [15] Churchland, Paul, 1985. "Reduction, Qualia, and the Direct Introspection of Brain States," *Journal of Philosophy*, 82: 8-28.
- [16] Conee, Earl, 1985. "Physicalism and Phenomenal Qualities," *Philosophical Quarterly*, 35: 296-303.
- [17] Conee, Earl, 1994. "Phenomenal Knowledge," *Australasian Journal of Philosophy*, 72: 136-150.
- [18] Crane, Tim, 2003. "Subjective Facts," in H. Lillehammer and G. Rodriguez-Pereyra (eds.), *Real Metaphysics: Essays in honour of D. H. Mellor*, London: Routledge, available at [http://web.mac.com/cranetim/Tims\\_website/Crane\\_papers.files/Subjective%20Facts.pdf](http://web.mac.com/cranetim/Tims_website/Crane_papers.files/Subjective%20Facts.pdf).
- [19] Dennett, Daniel, 1991. *Consciousness Explained*, Boston: Little Brown and Company.
- [20] Dennett, Daniel, 2004. "“Epiphenomenal” Qualia?" in Ludlow, Nagasawa and Stoljar: 59-68. This is an excerpt from Dennett 1991.
- [21] Dennett, Daniel, 2007. "What RoboMary Knows," in Alter and Walter: 15-31.
- [22] Dretske, Fred, 1999. "The Mind's Awareness of Itself," *Philosophical Studies*, 95: 103-124.
- [23] Foss, Jeff, 1989. "On the Logic of What It Is Like to Be a Conscious Subject," *Australasian Journal of Philosophy*, 67: 205-220.
- [24] Gertler, Brie, 1999. "A Defence of the Knowledge Argument," *Philosophical Studies*, 93: 317-336.
- [25] Graham, George and Terence Horgan, 2000. "Mary, Mary, Quite Contrary," *Philosophical Studies*, 99: 59-87.
- [26] Graham, George and Terence Horgan, 2005. "Mary Mary, *Au Contraire*: Reply to Raffman," *Philosophical Studies*, 122: 203-212.
- [27] Harman, Gilbert, 1990. "The Intrinsic Quality of Experience," in J. Tomberlin (ed.), *Philosophical Perspectives* 4, Atascadero, California: Ridgeview: 31-52.
- [28] Hellie, Benj, 2004. "Inexpressible Truths and the Allure of the Knowledge Argument," in Ludlow, Nagasawa and Stoljar: 333-364.
- [29] Holman, Emmett L., 2006. "Dualism and Secondary Quality Eliminativism: Putting a New Spin on the Knowledge Argument," *Philosophical Studies*, 128: 229-256.
- [30] Horgan, Terence, 1984. "Jackson on Physicalism and Qualia," *Philosophical Quarterly*, 34: 147-153.
- [31] Horowitz, Amir and Hilla Jacobson-Horowitz, 2005. "The Knowledge Argument and Higher-Order Properties," *Ratio*, 18: 48-64.
- [32] Howell, Robert J., 2007. "The Knowledge Argument and Objectivity," *Philosophical Studies*, 135:

145-177.

- [33] Jackson, Frank, 1982. "Epiphenomenal Qualia," *Philosophical Quarterly*, 32: 127-136.
- [34] Jackson, Frank, 1986. "What Mary Didn't Know," *Journal of Philosophy*, 83: 291-295.
- [35] Jackson, Frank, 1995. "Postscript," in P. K. Moser and J. D. Trout (eds.), *Contemporary Materialism*, New York: Routledge: 184-189, reprinted in Ludlow, Nagasawa and Stoljar: 409-415.
- [36] Jackson, Frank, 1998a. *From Metaphysics to Ethics*, Oxford: Oxford University Press.
- [37] Jackson, Frank, 1998b. "Postscript on Qualia," in his *Mind, Method, and Conditionals*, London: Routledge: 76-79, reprinted in Ludlow, Nagasawa and Stoljar: 417-420.
- [38] Jackson, Frank, 2002. "Mind and Illusion," paper presented at the Royal Institute of Philosophy, published in A. O'Hear (ed.), *Minds and Persons*, Cambridge: Cambridge University Press, reprinted in Ludlow, Nagasawa and Stoljar: 421-442.
- [39] Jackson, Frank, 2003. "The Knowledge Argument," *Richmond Journal of Philosophy*, 3: 6-10, available at [http://www.richmond-philosophy.net/rjp/back\\_issues/rjp3.jackson.pdf](http://www.richmond-philosophy.net/rjp/back_issues/rjp3.jackson.pdf).
- [40] Jackson, Frank, 2004. "Foreword: Looking Back on the Knowledge Argument," in Ludlow, Nagasawa and Stoljar: xv-xix.
- [41] Jackson, Frank, 2005. "Consciousness," in F. Jackson and M. Smith (eds.), *The Oxford Handbook of Contemporary Philosophy*, Oxford, New York: Oxford University Press: 310-333.
- [42] Jackson, Frank, 2007. "The Knowledge Argument, Diaphanousness, Representationalism," in Alter and Walter: 52-64.
- [43] Jackson, Frank, 2009. "Replies to My Critics," in Ravenscroft: 387-474.
- [44] Jacquette, Dale, 1995. "The Blue Banana Trick: Dennett on Jackson's Color Scientist," *Theoria*, 61: 217-230.
- [45] Kallestrup, Jesper, 2006. "Epistemological Physicalism and the Knowledge Argument," *American Philosophical Quarterly*, 43: 1-23.
- [46] 北野安寿子, 2008. 「ジャクソンの知識論法に対する三つの主要な反論の検討」, 『哲学』(日本哲学会編) 59: 149-162.
- [47] Levin, Janet, 1986. "Could Love Be Like a Heatwave: Physicalism and the Subjective Character of Experience," *Philosophical Studies*, 49: 245-261.
- [48] Levin, Janet, 2007. "What Is a Phenomenal Concept?" in Alter and Walter: 87-110.
- [49] Levine, Joseph, 2008. "Phenomenal Concepts and the Materialist Constraint," in Alter and Walter: 145-166.
- [50] Lewis, David, 1983a. *Philosophical Papers* Vol. 1, Oxford: Oxford University Press.
- [51] Lewis, David, 1983b. "Postscript to "Mad Pain and Martian Pain"," in his *Philosophical Papers* Vol. 1: 130-132.
- [52] Lewis, David, 1988. "What Experience Teaches," *Proceedings of Russellian Society*, Sydney: University of Sydney, reprinted in his *Papers in Metaphysics and Epistemology*: 262-290.
- [53] Lewis, David, 1994. "Reduction of Mind," in S. Guttenplan (ed.), *A Companion to Philosophy of Mind*, Oxford: Blackwell: 412-431, reprinted in his *Papers in Metaphysics and Epistemology*: 291-347.
- [54] Lewis, David, 1999. *Papers in Metaphysics and Epistemology*, Cambridge: Cambridge University

- Press.
- [55] Loar, Brian, 1990. "Phenomenal States," in J. Tomberlin (ed.), *Philosophical Perspectives* 4, Atascadero, California: Ridgeview: 81-108.
  - [56] Loar, Brian, 1997. "Phenomenal States (Revisited Version)" in N. Block, O. Flanagan and G. Güzelçdere (eds.), *The Nature of Consciousness*, Cambridge: MIT Press: 597-616, reprinted in Ludlow, Nagasawa and Stoljar: 219-239..
  - [57] Ludlow, Peter, Yujin Nagasawa and Daniel Stoljar (eds.), 2004. *There's Something about Mary*, Cambridge: MIT Press.
  - [58] Lycan, William G., 1990. "What Is the 'Subjectivity' of the Mental?" in J. Tomberlin (ed.), *Philosophical Perspectives* 4, Atascadero, California: Ridgeview: 109-130.
  - [59] Lycan, William G., 1995. "A Limited Defence of Phenomenal Information," in Metzinger: 245-258.
  - [60] Lycan, William G., 2003. "Perspectival Representation and the Knowledge Argument," in Q. Smith and A. Jokic (eds.), *Consciousness: New Philosophical Perspectives*, Oxford: Clarendon Press: 384-395, available at <http://www.unc.edu/~ujane/PersWeb.html>.
  - [61] Malatesti, Luca, 2004. "The Knowledge Argument," Doctoral Thesis, available at [https://dspace.stir.ac.uk/dspace/bitstream/1893/22/1/Malatesti\\_Thesis\\_Complete.pdf](https://dspace.stir.ac.uk/dspace/bitstream/1893/22/1/Malatesti_Thesis_Complete.pdf).
  - [62] McGeer, Victoria, 2003. "The Trouble with Mary," *Pacific Philosophical Quarterly* 84: 384-393.
  - [63] McMullen, Carolyn, 1985. "'Knowing What It's Like' and the Essential Indexicals," *Philosophical Studies*, 48: 211-233.
  - [64] Mellor, D. H., 1993. "Nothing Like Experience," *Proceedings of the Aristotelian Society*, 93: 1-16.
  - [65] Meyer, Uwe, 2001. "The Knowledge Argument, Abilities, and Metalinguistic Beliefs," *Erkenntnis*, 55: 325-347.
  - [66] Metzinger, Thomas (ed.), 1995. *Conscious Experience*, Exter: Imprint Academic.
  - [67] Montero, Barbara, 2007. "Physicalism Could Be True Even If Mary Learns Something New," *Philosophical Quarterly*, 57: 176-189.
  - [68] Nagasawa, Yujin, 2002. "The Knowledge Argument Against Dualism," *Theoria*, 68: 205-223.
  - [69] Nagasawa, Yujin, 2008. *God and Phenomenal Consciousness: A Novel Approach to Knowledge Arguments*, Cambridge: Cambridge University Press.
  - [70] Nagel, Thomas, 1974. "What Is It Like to Be a Bat?" *Philosophical Review*, 83: 435-450.
  - [71] Nemirow, Laurence, 1980. "Review of *Mortal Questions* by Thomas Nagel," *Philosophical Review*, 89: 473-477.
  - [72] Nemirow, Laurence, 1990. "Physicalism and the Cognitive Role of Acquaintance," in William Lycan (ed.), *Mind and Cognition: A Reader*, Oxford: Blackwell: 490-499.
  - [73] Nemirow, Laurence, 2007. "So *This* Is What It's Like: A Defense of the Ability Hypothesis," in Alter and Walter: 32-51.
  - [74] Nida-Rümelin, Martine, 1995. "What Mary Couldn't Know: Belief About Phenomenal States," in Metzinger: 219-241, reprinted in Ludlow, Nagasawa and Stoljar: 241-267.
  - [75] Nida-Rümelin, Martine, 2002. "Knowledge Argument," in the *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, available at <http://plato.stanford.edu/entries/qualia-knowledge/>.
  - [76] Noordhof, Paul, 2003. "Something Like Ability," *Australasian Journal of Philosophy* 81: 21-40.



- [77] Papineau, David, 2007. "Phenomenal and Perceptual Concepts," in Alter and Walter: 111-144.
- [78] Pelczar, Michael, 2005. "Enlightening the Fully Informed," *Philosophical Studies*, 126: 29-56.
- [79] Pereboom, Derk, 1994. "Bats, Brain Scientists, and the Limitations of Introspection," *Philosophy and Phenomenological Research*, 54: 315-329.
- [80] Perry, John, 2001. *Knowledge, Possibility, and Consciousness*, Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- [81] Pettit, Philip, 2004. "Motion Blindness and the Knowledge Argument," in Ludlow, Nagasawa and Stoljar: 105-142.
- [82] Pettit, Philip, 2009. "Consciousness and the Frustrations of Physicalism," in Ravenscroft: 163-187.
- [83] Raffman, Diana, 2005. "Even Zombies Can Be Surprised: A Reply to Graham and Horgan," *Philosophical Studies*, 122: 189-202.
- [84] Ravenscroft, Ian, 2009. *Minds, Ethics, and Conditionals: Themes from the Philosophy of Frank Jackson*, Oxford: Clarendon Press.
- [85] Robinson, Howard, 1993. "Dennett on the Knowledge Argument," *Analysis*, 53: 174-177, rep. in Ludlow, Nagasawa and Stoljar: 69-73.
- [86] Robinson, William, 2002. "Jackson's Apostacy," *Philosophical Studies*, 111: 277-293.
- [87] Sommers, Tamler, 2002. "Of Zombies, Color Scientists, and Floating Iron Bars," *Psyche*, 8, available at <http://psyche.cs.monash.edu.au/v8/psyche-8-22-sommers.html>.
- [88] Stemmer, Nathan, 1989. "Physicalism and the Argument from Knowledge," *Australasian Journal of Philosophy*, 67: 84-91.
- [89] Stjernberg, Fredrik, 1999. "Not So Epiphenomenal Qualia, or, How Much of a Mystery Is the Mind?" available at <http://www.lucs.lu.se/spinning/categories/language/Stjernberg/index.html>.
- [90] Stoljar, Daniel, 2001. "Two Conceptions of the Physica," *Philosophy and Phenomenological Research*, 62: 253-281, excerpt reprinted in Ludlow, Nagasawa and Stoljar: 309-331.
- [91] Stoljar, Daniel, 2005. "Physicalism and Phenomenal Concepts," *Mind and Language*, 20: 469-494, available at <http://philrsss.anu.edu.au/~dstoljar/onlinepapers/PPC.pdf>.
- [92] Stoljar, Daniel and Yujin Nagasawa, 2004. "Introduction to *There's Something about Mary*" in Ludlow, Nagasawa and Stoljar: 1-36.
- [93] Tye, Michael, 1986. "The Subjective Qualities of Experience," *Mind* 95: 1-17.
- [94] Tye, Michael, 1998. "Knowing What It Is Like: The Ability Hypothesis and the Knowledge Argument," in Gerhard Preyer and Frank Siebelt (eds.), *Reality and Humean Supervenience: Essays on the Philosophy of David Lewis*, Frankfurt: Proto Sociology, reprinted in his *Consciousness, Color, and Content*: 3-20.
- [95] Tye, Michael, 1999. "Phenomenal Consciousness: The Explanatory Gap as a Cognitive Illusion," *Mind*, 108: 706-725, reprinted in his *Consciousness, Color, and Content*: 21-42..
- [96] Tye, Michael, 2000. *Consciousness, Color, and Content*, Cambridge: MIT Press.
- [97] Tye, Michael, 2009. *Consciousness Revisited: Materialism without Phenomenal Concepts*, Cambridge: MIT Press.
- [98] Van Gulick, Robert, 1992. "Understanding the Phenomenal Mind: Are We All Just Armadillos?"

- in M. Davies and G. Humphries (eds.), *Consciousness: A Mind and Language Reader*, Oxford: Basil Blackwell. An excerpt is reprinted in N. Block, O. Flanagan and G. Güzeldere (eds.), *The Nature of Consciousness: Philosophical Debates*, Cambridge, Massachusetts: MIT Press: 559-566.
- [99] Van Gullick, Robert, 2004. "So Many Ways of Saying No to Mary," in Ludlow, Nagasawa and Stoljar: 365-405.
- [100] Van Gullick, Robert, 2009. "Jackson's Change of Mind: Representationalism, a Priorism and the Knowledge Argument," in Ravenscroft: 189-218.
- [101] Watkins, Michael, 1989. "The Knowledge Argument against 'the Knowledge Argument'" *Analysis*, 49: 158-160.
- [102] Warner, Richard, 1986. "A Challenge to Physicalism," *Australasian Journal of Philosophy*, 64: 249-265.
- [103] 山口尚, 2008. 「物理主義と知識 ジャクソンの「白黒のメアリー」を巡って」, 『アルケー』(関西哲学学会年報) 16: 141-150.

## 著者情報

山口尚 ( 京都大学大学院人間・環境学研究科 )